

針葉樹会報

第 134 号
2015 年 12 月



目 次

北海道の山旅	佐薙	北	北海道の山旅	佐薙
紀伊山地行	半場	三	紀伊山地行	半場
南アルプス 荒川三山・赤石岳縦走	小島 和人／中村 雅明	南	南アルプス 荒川三山・赤石岳縦走	小島 和人／中村 雅明
イスアルプス ハイキング三昧	佐藤 久尚	ア	イスアルプス ハイキング三昧	佐藤 久尚
十勝連峰トムラウシ縦走	中村 雅明	ル	十勝連峰トムラウシ縦走	中村 雅明
十勝岳・富良野岳行	宮武 幸久	ー	十勝岳・富良野岳行	宮武 幸久
中村慎一郎君遭難碑を探して	松尾 信孝	ス	中村慎一郎君遭難碑を探して	松尾 信孝
初秋の妙高山	加藤 博行	イ	初秋の妙高山	加藤 博行
三月会通信	高崎 雅明	ン	「FN短大」の記録	高崎 雅明
編集後記	内海 拓人	大	「FN短大」の記録	内海 拓人
撮影・中村雅明	大矢 雅明	矢	北岳夏合宿(二泊三日班)	大矢 雅明
	和樹 博行	和	北岳夏合宿(一泊一日班)	和樹 博行
	俊平	俊	会員の消息	俊平
47 40	37 34	32 29 28	25 24 23 16 10 5	3 2

発行日 2015年12月14日	針葉樹会報 第134号	編集人 小島 和人 〒241-0817 横浜市旭区今宿2-60-1 会報幹事／小島和人、井草長雄 川名真理
発行者 針葉樹会 (会長 竹中彰)		
印刷所 ヤマノ印刷株		

一橋山岳会ホームページ <http://huhac.com/>

北海道の山旅

佐薙 恭（昭31年卒）

北海道には「日本百名山」が9座ある。自分はいわば百名山脱落者であり、もうそれを積極的に追つかけていく若さはないのだが、いつの間にか北海道ではこの9座全部に、そしてそれに加えていくつかの北海道の他の名峰に登ることができた。老骨の年代になつた今、これから先、北海道の山にでかけることはもうないかもしれないという思いから、自分と北海道の山との係り合いを振り返つてみるとした。

1 1999年9月 *幌尻岳と樽前山

98年に米国勤務を終えて帰国、やがて毎日が日曜日になつた。高校時代の山仲間の一人が百名山終盤戦、次は幌尻岳とのこと、運転免許のない彼の運転手を買って出た。その時自分は67才、北海道の土地を踏むのは人生初めてだつた。少し前の会報の上原兄の幌尻の記録がとても参考になつた。幌尻山荘までの

糠平川の渡渉、往復20回弱、後にも先にもあんな気持ちのいい渡渉をしたことはない。登頂後、帰りの便まで余裕があつたので支笏湖畔に泊まり、噴煙をあげる樽前山に登つた。

4 2009年7月 黒岳から忠別岳・標津岳

この時は少人数。蛭川夫妻、竹中兄、蛭川兄の知人の北電山岳部OB藤田さん。藤田さんの車で先ず黒岳、石室泊。主稜線を南に向かい白雲岳避難小屋に連泊し、熊よけの鈴を鳴らしながら忠別岳を往復、赤岳を経て下山。途中一日は厳しい風雨の中を歩いた。その後、静かな標津岳。養老牛温泉で絶滅危惧種のシマフクロウを観察。そして釧路湿原をガイドの案内で自然観察ウォーク。この夏の大雪山系の天候はやや不順で、我々の数日後、トムラウシ周辺でツアーダンサウス数人の悲惨な遭難事故が起きた。

5 2012年7月 *トムラウシ山・黒岳から*旭岳・アポイ岳

この頃までに東京生まれ、東京育ちの蛭川兄が北海道に移住していた。その蛭川兄が以前から会員だつた北海道、静内山岳会の山田さん他一人の方々の強力なサポートを得て、南池キヤンプ場までテントをあげてトムラウシに余裕をもつて登頂した。針葉樹会からは7名が参加。下山後は会員だけで黒岳から北鎮岳と間宮岳を経て旭岳まで大雪山の核心部を歩いた。更に4名の延長戦は襟裳岬と自然観察ガイド付きでアポイ岳へ。アポイ岳はつ

い最近、世界ジオパークに認定された。アボイを選んだ蛭川兄の先見の明に敬意。札幌でも公園の女性ガイドの案内で野幌森林公園探訪。

6 2014年7月 *羅臼岳・*斜里岳・

*雌阿寒岳

小野兄のガイドで道東の3名山を3日連続で登る。何れも個性豊かな山だった。羅臼岳は山頂直下の急登、北方領土の眺望。斜里岳の登りの沢ルートは少々タフで下りは尾根道を歩いた。雌阿寒岳は噴煙の山。会員7名、他1名。下山後は釧路湿原散策。釧路から札幌までJR北海道の特急を初体験。そして北大植物園で樹木観察。

7 2015年7月 *十勝岳・富良野岳

この夏自分は83才になっていた。今回は小野兄の勤務先だった北電の山岳部の後輩、地元富良野在住の手塚さんによるガイド役、運転、料理、生ビール飲み放題など大変お世話になつた。会員5名、他1名は札幌の女医、橋本先生。自分が日ごろ頼りにしているツムラ68について「あれは脚がつった時その場でのむこと、出発前夜や当日の朝のんでもダメ」との貴重な教示あり。この山行では昨今の活火山事情もあり、ヘルメットを求め携行した

が使用にいたらザックの中。かぶる機会が次くるのか?

以上足かけ17年、7回の山行が小生の北海道の山体験のすべてなのだが、今この経験を振り返ってみて気が付いたこと。最初の幌尻岳を除いて、すべてが針葉樹会員との山行であり、そして大事なことはそのうちのいくつかは、会員の現地でのつながりで会員外の方々のサポートのおかげで実行できたこと。幌尻以外自分がいつも最高齢だったこと。企画担当の会員は高齢者の体力などを考慮に入れてプランしてくれたのだろうということ。

感謝の気持ち、そしていつものことながら、針葉樹会員だったからこそ、こういう経験ができ楽しめたのだという思い。

そして自分にとって、これらの山の経験は、単に幾つかの名峰に登つたということだけではない。自然観察学徒の小学生にとって、山麓から山頂まで、多くの貴重な体験の積み重ねがある。そのうちのいくつかを列挙すると、動物との対面では、エゾシカ、キタキツネ、

ナキウサギ、シマフクロウ、オロロン鳥、タチヨウ、アマツバメ、クジヤクチョウ、コヒオドシ、などなど。一度もヒグマと鉢合わせしなかつたのはラッキーと言うべきか、残念というべきか? 植物では、多数の高山植

物の中から一つだけ選ぶとすれば、山本(尚)兄と同定にこぎつけたオオバタケシマランという地味な花。樹木では針葉樹3種(トドマツ、エゾマツ、アカエゾマツ)のうち、後者2種の識別の試み。初夏の釧路湿原で地元の人に教えてもらったハシドイの、たわわな香りのいい白い花。英語名はJapanese tree lilac。樹皮がアイヌの人たちの生活必需品の材料だったシナノキの巨木、長い間求めていた珍しい形のオヒヨウの葉、などなど。どれも忘れ難い体験であり自分にとって宝物である。

(注・山名の前の*は百名山を示す。)

紀伊山地行

半場 三雄 (昭41年卒)

8月21日

「おじさん軍団」(大台ヶ原ですれ違つた見知らぬ方の命名)は浜松駅から車で(9時50分発)伊勢湾北部を経て道の駅「関宿」(東海道五十三次の一つ)で昼食休憩をとり、東名阪国道を西進し伊賀の近くからは紀伊半島中

部を吉野川沿いに溯り、奈良県上北山村の「佐和又山ヒュッテ」泊（16時40分着）。

恒例の一杯の後は、定員60名位の大部屋（廃校校舎の再利用施設）で各自の寝息が届かぬ距離をとり、ZZZZZZ。海拔1100m故か、真夏で冷房なしでも各自よく寝られた様子。

8月22日

7時に出発し「大台が原ドライブウェイ」で、散策基地の「ビジターセンター」のある



左から、小島、半場、佐藤、小野、宮武の各氏



熊野古道、馬越峠にて

駐車場へ。形ばかりの準備運動をし、登山届けを提出し、経験者の小野さんをトップに、小島さんの「じんがりを宮武さんで」の声と共に隊列が整い、東大台コースを時計回りに

散策開始。「日出が岳」から「正木が原」までは小野さんによると昔は未整備であつた木道が整備され正に遊歩道だ。道中では、「アサギマダラ」の撮影に出会い、大蛇（英訳ではclipp）のスリリングさが印象的であつた。「日出が岳・散策路のピーク」「シオカラ谷・散策路のボトム」では、へばりかけたが小島さんのキャラ

メルと小野さんの梅干に元気づけられ、強靭なメンバーにみまもられて全体としては何とか帳尻が合つて予定のコースタイムで周回が出来た。

佐藤力さんの靴が悲鳴あげていたが、小学生の心臓と、天候（一時的なミストに包まれた程度）と共に、何とかもつた。

散策を終え、ドライブウェイを下つた後

国道を、一路宿泊地を目指して半島を南下、熊野市の端からは通行量が少ないが立派な国道を東進し、尾鷲市の「民宿イワナの里」泊（16時20分着）。ペットとして飼育されている小鹿3頭を横目にイワナの刺身を主菜の宴会兼夕餉。

宿からは、翌日目指す天狗倉山（てんぐらさん：海拔522m）がくつきりと望まれる。

8月23日

7時半に出発し「熊野古道」の一端である「馬越峠道」（江戸時代初期に整備されたようである）を裏口になる尾鷲側から目指す。宿主から教えられた道順で、馬越公園（駐車場）を目指すがスンナリとは行かず、歩行開始までに30分以上ロスし何とか辿りつくことが出来た。

馬越峠の分岐点と天狗倉山のピークとの往復。頂上直下では岩登りイメージの急登とな

神武天皇像が立つ大台ヶ原の牛石ヶ原で
 感謝。
 メンバー
 トップ：小野、セカンド：半場、次：佐藤力、
 リーダー：小島、しんがり：宮武の5人衆
 コースタイム（記録は宮武さん）

8／22（土） 7時50分ビジターセンター発、8時40分日出ヶ岳頂上、10時尾鷲辻、10時40分大蛇、11時40分シオカラ谷着昼食、13時ビジターセンター着

8／23（日） 8時30分馬越公園発、9時馬越峠、10時天狗倉山頂上、11時馬越公園着

この日も心肺機能の差を実感することとはなったが、馬越公園（駐車場）で散策を終え道の駅「海山」（馬越峠道）の表口登山道入口は日曜でもあり、沢山の自家用車とハイカーで賑やかだった）で一服してからはひたすら鳥羽港へ。何とか13時出航のフェリーに間に合つた。下船後、伊良湖港からは途中2箇所の道の駅に立ち寄つて16時40分浜松駅着。各自買い求めた土産物のパッキング姿を横目に、3日間の天候と、行事の無事終了を



神武天皇像が立つ大台ヶ原の牛石ヶ原で

紀行文後記

今回の2泊3日の計画は、クレージー会の集まりの場で、小島さんの発声から「いつも関東方面で催行されているクレージー会をたまには浜松方面…例えば関が原近辺で」の小島さんの発声から糸余曲折を経て計画された。催行時期は紅葉の時期がベストのようではあるが、移動距離などを考慮した結果、クレージーの面子4人にゲストの宮武さんを加えてのこの時期の催行となつた。多くの道の駅で小休止しながらとはいへ、移動距離が長くて苦痛ではなかつたかと思うところがあるが、車中では夫々の分野のエキスパートの轟音が聞けて退屈するところは無かつた。

南アルプス 荒川三山・赤石岳縦走

小島さん、川名さんと続けてきた恒例の夏山登山は今年は南アルプス（以下南ア）南部縦走を計画しました。権島から入山し、荒川三山（赤石岳・聖岳・光岳）と歩き、易老渡に下山します。山小屋に6泊。南ア南部の縦走は昔は大変で、転付峠を越えて二軒小屋に下り千枚岳まで南ア南部でも屈指の急登に苦しみ、はるばる光岳まで縦走した後の下山も寸又峡温泉まで延々11時間を越える林道歩きがあり、時間と体力がある学生時代でないとできない山行でした。小島さん、中村の70歳超の2人が縦走する気になったのは、静岡から権島までのバス便があること、光岳小屋からタクシーを予約しておくと下山口の易老渡から1時間20分で平岡に出られることです。昔に比べると交通の便が良くなつたのと、小屋泊で縦走が出来るのは助かります。日程は梅雨が確実に明ける7月末から8月初の8日

小島 和人（昭40年卒）
中村 雅明（昭43年卒）

間（予備日含む）として3人の都合を調整しましたが、川名さんの都合がつかず、小島さん、中村の2人で行くことになりました。小島さんは初めての挑戦、中村は荒川前岳から赤石岳が50年振り、聖岳から茶臼岳が45年振りです。7／28に入山し、好天にも恵まれ荒川三山、赤石岳を縦走し、7／31に予定通り百間洞に着きました。といろがその晩に小島さんが一睡も出来ない事態に見舞われました。翌日は聖平までの8時間のコースタイムを考えてこいで縦走を打ち切り、赤石岳に引き返し赤石小屋に一泊し8／2に榎島に下山しました。目標とした光岳まで縦走できず残念でしたが、南アルプスの核部分の荒川三山、赤石岳を存分に楽しみました。3000mを越える稜線からの大展望、豊富な高山植物は期待以上でした。来年は易老渡から入山し、光岳～茶臼岳～聖岳まで北上する雪辱戦（南アルプス縦走その2）をやろうと小島さんと意気投合しました。（文責：中村）

I メンバー

小島和人、中村雅明

II 行程

7月28日 静岡（9:50）＝（バス：ザトウジヤストライン）＝畠薙第一ダム（13:15～14:00）

＝（シヤトルバス：東海フォレスト）＝榎島（14:50）

7月29日 榎島（5:32）～6時 清水平（9:20～40）～5時 駒鳥池（12:35～45）～2時 千枚小屋（13:25）

7月30日 千枚小屋（5:38）～3時 千枚岳（6:35～45）～3時 荒川東岳（9:38～9:00）～3時 中岳（10:25～35）～2時 荒川前岳（10:50～52）～2時 荒川小屋（12:15）

7月31日 荒川小屋（5:18）～2時 大聖寺平（5:58～6:06）～2時 小赤石岳（7:50～58）～2時 赤石岳（8:42～9:50）～3時 百間洞山の家（12:18）

8月1日 百間洞山の家（6:30）～8時 赤石岳（11:00～37）～赤石小屋への分岐（11:55～58）～3時 富士見平（13:51～58）～赤石小屋（14:30）

8月2日 赤石小屋（5:58）～3時 榎島ロッジ（8:40～10:30）＝（シヤトルバス）＝畠薙第一ダム（11:30～40）＝（タクシー）＝静岡（15:00）

●7月29日（水） 曇り時々晴れ
線（しずてつジャストライン）で向かいました。1日1便、完全予約制（3100円）でした。途中2回休憩して13:15 畠薙第一ダム夏期臨時駐車場に着きました。約3時間半の長丁場でしたが、中村は小島さんから「休憩でバスを降りた時以外は殆ど寝ていたよ」と笑われました。

バスを降りた時以外は殆ど寝ていたよ」と笑われました。
（シヤトルバス）で東海フォレストの送迎バスに乗り換え、50分で榎島ロッジに着きました。このバスには榎島ロッジ等東海フォレストの山小屋に泊まるのみ乗ることができます。乗る時に払ったバス代3000円は、1泊2食900円に含まれています。榎島ロッジは定員180名の大きなロッジで風呂もあり（但し、2人とも入浴せず）、食事も美味く快適でした。

●7月29日（水） 曇り時々晴れ
5:30に榎島ロッジ出発。今日は千枚小屋（2500m）まで標高差1400m、約7時間のコースタイムなので気を引き締めて登山を開始しました。林道を二軒小屋方面に進み、瀧見橋の手前から左手の登山道に入りました。大井川本流沿いの崖を削って出来た道をしばらく辿り、奥西河内の吊橋を渡ると岩交りの尾根の急登が始まりました。天気は曇りで樹林帯の道は薄暗く南アルプスの奥深さを感じました。急登ひと登りで鉄塔、その先の岩尾根

鳥池からオオシラビソの原生林を抜けジグザグを登って13:25千枚小屋に着きました。櫻島から8時間。樹林帯の中の単調な登りの連續で疲れましたが、今日は曇りで暑い夏の日差しがなかつたので助かりました。小屋の廻りの斜面はマルバダケブキが咲き誇るお花畠で綺麗でした。千枚小屋は2009年6月末に焼失し新築されたとのこと。まだ新しく小奇麗でした。収容人数100名ですが夏の最盛期なので満室でした。1泊2食十トイレ代で9100円。



聖岳をバックに百間平にて。中村（左）と小島両氏

● 7月30日（木） 晴れ
今日は荒川三山を縦走して荒川小屋までのコースタイム3時間40分の短い行程です。5:40千枚小屋発。登り始めからシナノキンバイ、ミヤマキンバイ、ハクサンフウロ、マルバダケブキなどが咲くお花畠です。それを過ぎると樹林が開け富士山撮影ポイント。次の登りが続きました。清水平は冷たい沢の水が流れる絶好の休憩場所でした。1回目の昼食を摂つて一息つきました。その後、蕨段まで急登が続いて少し緩やかな登り、見晴台を過ぎると木馬道跡の急な坂道が続きます。この坂道で小島さんの足が轍つて「芍薬甘草湯」を飲んだこともあり駒鳥池までゆつくりペースで登りました。駒鳥池の周囲は湿地で緑色の苔に覆われて幽玄の趣がありました。駒

鳥池からオオシラビソの原生林を抜けジグザグを登って13:25千枚小屋に着きました。櫻島から8時間。樹林帯の中の単調な登りの連續で疲れましたが、今日は曇りで暑い夏の日差しがなかつたので助かりました。小屋の廻りの斜面はマルバダケブキが咲き誇るお花畠で綺麗でした。千枚小屋は2009年6月末に焼失し新築されたとのこと。まだ新しく小奇麗でした。収容人数100名ですが夏の最盛期なので満室でした。1泊2食十トイレ代で9100円。

に咲いています。千枚岳からの登山道はやせ尾根となり、丸山とのコルに下りる岩場は鉄梯子が欲しい危険な箇所でした。その先の足元、尾根の斜面にはチシマギキヨウ、タカネマツムシソウの紫、ミネウスユキソウ、イワツメクサの白、ウサギキクの黄、ヨツバシオガマの赤桃、色とりどりの花が咲き緊張感が和らぎました。丸山（3032m）を過ぎると岩稜帯になり、大きな岩の上を越えながら悪沢岳の頂上を目指します。かなりつらい登りですが、遠くに赤石岳眺め、足元の花を楽しみながら登るので疲れが癒されます。歩き始めてから3時間、8:40荒川東岳（悪沢岳）3142m着。主脈から離れ日本で第6位（南ア南部の最高峰）の高さなので南アの中でも優れた展望が得られます。これから向かう中岳、前岳、赤石岳、前岳から北方に小河内岳から塩見岳、その奥に間ノ岳、北岳の巨峰が聳えます。頂上の岩陰にはチシマギキヨウの紫、カンチコウゾリナの黄、イワツメクサ、ミヤマミミナグサの白、ヨツバシオガマの赤紫が咲き、360度の山岳展望と合わせて贅沢な頂上です。荒川中岳へは傾斜が急なもうい尾根を250m下つてその高さまで登り返します。中岳避難小屋前で小憩後、前岳へ。荒川小屋への下降点にザックを置いて荒川前岳往復。頂上には三伏峠から縦走して来た年

配の女性が1人で休んでいました。荒川小屋へ下る荒川前岳の南東斜面は南ア最大のお花畠。総200m横100mの斜面一杯に黄色のミヤマキンポウゲ、シナノキンバイ、イワベンケイ、ミヤマタンポポ、白色のハクサンイチゲ、ミネウスユキソウ、紅色のタカネヤハズハコ、ハクサンフウロ、茶褐色のクロユリ、紫色のミヤマトリカブト、ミヤマオダマキ……が咲き乱れていました。正に百花繚乱。今回の山行のお目当て通りの素晴らしいお花畠に満足して12:15荒川小屋に着きました。昼食を兼ねてのラーメン(1000円)で腹ごしらえした後、ビールで乾杯。荒川小屋は収容人員100名。トイレ、水場が少し離れた所にあるのが難点ですが、小屋内部は綺麗で食事も良く快適でした。

●7月31日(金) 晴れ

縦走3日目、5:18荒川小屋発。ガスもなく空は晴れ上がり気持ち良い夏山の朝です。小屋から急登の後、道の両脇に朝露に濡れるキバナシャクナゲの群落を見つけ写真を撮りました。その先の小礫のトラバース道を緩やかに登ります。大聖寺平まで正面に小赤石岳を見ながら歩く気分は「これぞ南ア縦走」と格別です。ダマシ平からつづら折りの急登3pで小赤石岳。ここでライチョウの子供2羽を見つけました。チョコチョコ動くので中々焦

点が合いませんが何とか写真を撮りました。小赤石岳から少し進んだ稜線で今度は親のライチョウを見つけました。普段はすぐ移動してしまうところ稜線でじっと動かないで良い姿の写真を撮ることができました。赤石岳へ続く稜線はお花畠が連続するので有名です。稜線から少し足を踏み入れたお花畠でミネウスユキソウ、イワツメクサ、チシマギキヨウの見事な群落写真を撮りました。

8:42赤石岳頂上着。夏山の最盛期、南ア南部で最も人気のある山だけあって多くの登山者で賑わっています。聖岳以南はガスの中でしたが、赤石岳から下つて百間平に向かう馬ノ背の稜線が「これぞ南アの稜線！」と印象的です。北方には昨日歩いて来た荒川三山、その先に塩見岳、その右奥に北岳、左奥に仙丈岳など南ア北部の3000m峰、遙か遠くに北アルプス、その左に中央アルプスの山々が望めます。深田久弥が「日本百名山」で赤石岳の頂上を「私の記憶にあるあらゆる頂上の中でも、赤石岳のそれほど立派なものはない。それは実におおらかな風貌をそなえている。広々としているがただの緩慢ではなく、キリッとした緊まりがある。これほど寛容と威厳を兼ねそなえた頂上はほかにあるまい。」と絶賛しています。この居心地の良い頂上で1時間たっぷり休み、9:50百間洞に向かいま

した。ここから先は登山者が少なくなりました。赤石岳避難小屋の手前で右に折れしばらく行くと急な下りになりました。下り終わると「百間洞へ120分」の標柱。そこからは赤石岳斜面のトラバース道。それが終わると馬ノ背の尾根歩き。南アルプスの縦走の楽しさを味わいながら気持ち良く歩きました。この尾根の途中の窪地の聖岳・荒川岳のビューポイントで休憩しましたが、ガスが湧いて展望がなく残念でした。百間平を過ぎると百間洞に向かってどんどん下ります。正面に百間洞から中盛丸山に登る道が見え下るにつれ登りがそれだけ高くなり「あしたはあれを登る」と嘆きました。ゴーロの急坂が終わると樹林帯に入り、沢筋を少し下ると12:18百間洞山の家に着きました。定員60名。1992年秋に新築された小屋で快適でした。洞の暗いイメージと違つて小屋の前のベンチ脇には綺麗な水が流れ、涼しい風が吹きわたります。ベンチに座つて順調に縦走してきたことを祝つてビールで乾杯しました。小屋の近くに聖岳の展望台がありました。そこに行く道の両側の斜面がミヤマトリカブトの群落が見事で写真を沢山撮りました。夕食はボリュームたっぷりのとんかつに感激しました。縦走の疲れもたまっていたので、早々と就寝しました。

IV 後半の行動概要（7月31日夜～8月2日…百間洞の夜～下山） 小島和人記

● 7月31日夜

昼には百間洞の小屋に着き先ずは受付二階に自分たちのスペースを確保、それから外に出てゆつくり缶ビールで中村さんと乾杯、アタリメを肴にゆつたりと小屋の横のせせらぎの音と爽やかなそよ風に包まれてこれぞ極楽とのんびりしました。昨日今日と歩いて来た南アルプスの3000m稜線の、叫びたくないうな澄み切った山々の景色を思いだし、快調な体の調子に思わず感謝していました。夕食のとんかつに、山の食事も良くなつたものだと感心し、6時過ぎに再び外に出てウイスキーを取り出し、明日の聖岳の稜線の漫歩を想像して思わず体全体が喜びに震えていました。長引かないように注意して7時半ごろには床に就きました。寝ようと思いましたが昼からゆつくり休んだからか、一向に眠くならず昨日今日の稜線の美しい景色、雷鳥親子、山の桔梗の鮮やかな青紫色と色々なことが浮かんで来ました。二時間ごとに小屋の外に出て月夜に浮かぶ山容眺め、火照った体を冷やしました。山以外の事を考えた方が良いかと最近のゴルフのすべてのショットを思い浮かべました。でも状況に変化はありません。

● 8月1日（土） 晴れ時々曇り

寝られぬままに新しい日を迎えるました。これは拙いぞと思いついたが頭はさえるばかり、一時間おきに外に出て体を冷やし、水でハンカチを濡らして持ち帰り頭を冷やす。

トイレから一階、一階から二階の寝床に上がり、そこで動悸を覚えるように感ずる。「後3時間眠られる大丈夫、あと2時間大丈夫、あと1時間かー」。午前3時半過ぎに階下の台所で物音がして、下りて行つて従業員に「一睡もできなかつた。血压計を貸してください」「そんなものありません」「朝になつたら無線で相談できるお医者さんいますかね?」「そんな人いません」。かくて打つ手なし、朝ご飯が済んだらもう一度寝て今日は沈澱しようとも密かに決める。朝の食欲普通で、朝食を平らげる。食後中村さんから睡眠剤をもらつて飲んで寝ようとするが眠くならない。考えてみると、以前に徹夜明けで会社から帰りそのまま一風呂浴びてゴルフに行つたら信じがたく良いスコアが出たことがある。横になつていたのだから体は大丈夫ではないか? 予定通り聖に向かおうか? いや万一路で心臓発作等起こしたら「シニアーが無理な登山で遭難」と報じられるに違いない。再建途上の「橋山岳部に大変な迷惑がかかることは絶対避けなければいけない。あれやこれや考えて、山小

屋のご主人達と相談して、結論は「人通りが少なく、小屋も少ない聖方面に行くのは避け、赤石岳に戻つて赤石小屋から権島に帰る」案に収まった。幸い小屋に在つた唯一の測定器で血中酸素は正常であるとの判定。駄目だったら戻る前提で稜線まで赤石岳方面に出よう、そして出来るだけ早く知り合いの医者に連絡を取ろうと6時半小屋を出発する。最初15分ピッチ次から20分ピッチでゆつくり歩いてもらう。心配するものだから体が重い。しかし三匹のほどで少し自信が出てくる。稜線について携帯が通じるようになり、八時過ぎに知り合いの医者に連絡取るも留守。止むなく北海道の小野さんに連絡し先日十勝で一緒だつた橋本先生に事情を話し、注意事項など訊いてもらう。結果的には「極度の興奮」位しか判断が出ず。体も動くことが解つたので先に進む。百間平周辺では昨日雲の中だった聖岳の全容が目の前、昨日霞んで見えた槍・穗高がはつきりと見えた。夏の静かな南アルプスの稜線を満喫できる精神状態になつた。それでも体を気遣つてゆつくり進む。11時過ぎに赤石岳の避難小屋に着いた。夏の間小屋を守るご夫婦が連絡を受けていて「異常はないですか? お茶出すからゆつくり休みから下りなさい」といたわってくれる。ぶつきらぼーに見えた百間洞の小屋の主人が

丁寧に連絡してくれていた事を実感、感謝する。小屋での大休止の後赤石山頂から12時に赤石小屋への分岐、それから急なガラ場の斜面を45分、気を使うくだりだったが谷川が近くに連れ、北沢源流部のシナノキンバイ、ハクサンイチゲ、ホソバトリカブトなどの群落にホツとする。高山植物の好きな中村さんカメラを出してパチパチ。樹林帯に入り、やれやれ着いたかと思つたのは誤りで、トラバースの長いこと、一時間半、雷が近くでなりだしたが雨の前の2時半に小屋に到着できた。赤石小屋に着くと小屋の主人が「あー小島さんの事は連絡が入っています。今夜は週末で大変混んでいますが、布団一枚確保できる静かなところを使ってください」と本館から30m位下ったところの小屋に案内してくれた。後でわかったことだが、冬季に登山者が使える避難小屋で柱等骨組丸出しの大きな木造建物。最初静かであったが、次々にシニアーのパーティーが送り込まれて二階まで一杯になった。それでも私と中村さんは十分なスペースを確保できた。夕食でビールを楽しみ7時過ぎには床に入った。間もなく寝込んでいたようである。

● 8月2日（日） 晴れ

昨夜は小用に一度起きたがぐつすり9時間眠ることが出来た。前夜は一体なんだつたの

か？ 5時からの朝食も美味しく平らげて小屋の前に広がる赤石岳の雄姿に当たる朝日を眺めて暫く過ごす。しかし昨日の事が胸の内にわだかる。百間洞の小屋に無事下山したと伝言を依頼し、小屋に御礼を言って下りにかかる。一部急なところもあるが全体に歩きやすい道で、どんどん下る中村さんを追つて、2、3組の団体登山を追い越して下る。

3ピツチで3時間半の行程を2時間半で下る。「橋下山部」と自負していた元気な現役時代を思い出し気分爽快。一日の事も忘れる。樋島ロツジでまずは10時半のクラブバスを予約、13時まで待たねばと思っていたのに大分早く帰れそう。シャワー室に行くと我々が一番、またまた爽快。ロツジでビールとコーラで乾杯。なんと私がコーラ。クラブバスの後、畑薙ダムで予約したタクシーに乗り、来る時と同じ3時間で静岡駅に着いた。タクシーの中でも中村さんと聖岳・光岳への再挑戦を約束し、塩見岳を初めとする南アルプスの稜線歩きを数年やろうと話した。是非針葉樹会員に声を掛け実現したいものだ。

(後日談、その後知り合いの医者にいろいろ相談したが、「興奮したのでしよう」の結論です。大枚をはたいて心臓ドックなど受診しましたが結果は「健康」でした)。

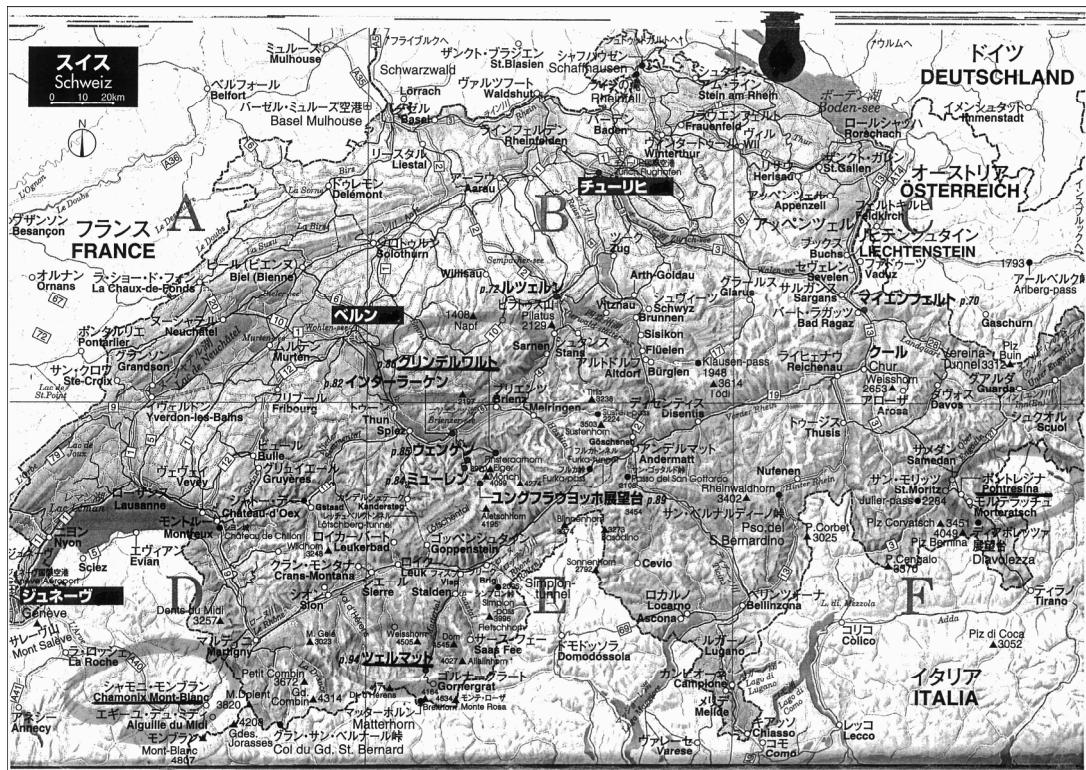
スイスアルプスは、17年前、仕事でジュネーブに行つた際、モンブランを一目見ようと日帰りでシャモニーまで足を伸ばしたが、その時は天気が悪く全く山は見られず、残念な思いをしたことがある。それだけに、一度は行つてみたい気持ちも強かつた。近くの図書館からガイドブック「地球の歩き方、スイ

スイスアルプス ハイキング三昧

佐藤 久尚 (昭41年卒)

去年の秋、岡田健志(昭42年)、中村雅明(昭43年)両氏とカラコルムを行つて、退職後毎年続けて来たヒマラヤのトレッキングも、あらかたの所は行き尽くし一段落と言つたところ。あと興味ある所として残っているのは、ヒンズークシユぐらいだが、今は治安が悪いので無理をする事はない。それに歳(73歳)も歳だし、ハードなトレッキングは避けたい。しかし年に一度は海外の見知らぬ山を見てみたい。そんな思いから、今年は気楽に行けそうなスイスアルプスに行くことにした。

スイスアルプスは、17年前、仕事でジュネーブに行つた際、モンブランを一目見ようと日帰りでシャモニーまで足を伸ばしたが、その時は天気が悪く全く山は見られず、残念な思いをしたことがある。それだけに、一度は行つてみたい気持ちも強かつた。近くの図書館からガイドブック「地球の歩き方、スイ



スイス地図

ス」を借りてきて、必要な情報を仕入れて大まかな計画を建てた。

時期としては、スイスは6～8月がハイシーズンなのでそれを外し、且つ、あまり寒くならない9月初旬、コースとしては、ジュネーブから入って、ハイキング拠点をシャモニーニー→ツェルマット→ボントレジーナ→グリンデルワルト→ジュネーブと、時計とは反対回りにスイスをほぼ一周するコース、そして各所で最低3日はハイキングを楽しむというのが、計画の概要。

当初、一人で行く心算でいたところ、女房が「ハイキングはしないがツェルマットまでは一緒に行きたい」と言い出したので、現地ではお互いの行動を制約しないという条件で、最初の8日間だけ女房が同行することとなつた。

8月 27日

羽田から北京経由ジュネーブに入った。飛行機は例によつてインターネットの格安航空券サイトで探して中国国際航空にしたが、これにした理由は、ただ価格が安いから、というだけではない（安いのはエミレーツやカタール航空などの中東系の便の方がもっと安い）。中国国際航空は、羽田23:30発でジュネーブにその日の夕方の丁度いい時間（18:25）に

着くこと、および、空いているだらうと予想したことからである。事実同便は予想した通り空いていて、帰りのジュネーブ・北京間などは一人で3席独占でき横になつてゆつたり寝られた。何と言つても飛行機は空いているのがいい。



スールレーユ峠にて。背景の山はピツベルニナ

(モンブラン山群)

8月28日 曇り

午前中ジュネーブの街中を観光して、11:30発のバスで最初のハイキング拠点のシャモニーに入つた。ジュネーブからシャモニーに入るには鉄道とバスがあるが、鉄道だと約3時間半かかるところをバスだと約1時間半でシャモニーに入れてバスの方が圧倒的に便利。但しバスは一日2便しかないので、事前に切符を買っておかないと乗れない恐れがある。今回は、ジュネーブに着いた晩、バスター・ミナルに直行して窓口の閉まる直前に切符を買う事ができたので、午前中ジュネーブで観光する時間が取れた。

シャモニーはモンブラン山群の登山基地として有名な街であるが、この時はちょうど「ウルトラ・トレイル・デュ・モンブラン」(モンブラン一周のトレイルランの大会。他にも短いコースもいろいろある由)の開催中で、大会参加者らしきアスリート風の男女やその応援団と思われる人々であふれかえっていた。

8月29日 曇り後晴れ

女房と一緒にロープウェイでエギュ・デュ・ミディ(3842m)に上がって、頂上の展望台からモンブラン(4810m)やグランド・ジョラス(4208m)等の迫力ある展望を楽しむ。その後、ロープウェイの

中間駅、プラン・ドゥ・レギュ(2317m)までケーブルで下つて、そこで女房と別れてハイキング開始(11:10)。ルートはシャモニー針峰群の山腹をトラバースするように延びている。左側にシャモニーの街を見下ろし、右側にグレボンやペイニユ峰など特徴のある針峰群を仰ぎながら緩やかなアップダウンの道を進み、最後の尾根を回り込むと

メール・ド・グラス氷河を見下ろす展望台に出た。そこからメール・ド・グラス氷河に向って下ると、モンタンベール(1913m)の登山電車の駅に着いた(14:35)。駅横のレストランで、グランド・ジョラス北壁やドリュー西壁の眺めを肴にビールで喉をうるおした後、登山電車でシャモニー(1035m)に帰る。

8月30日 晴れ

昨日登ったエギュ・デュ・ミディとはシャモニーの谷を挟んだ反対側からモンブランが見られるコースを歩いてみることにした。ブルバント(2525m)という展望台までは女房と一緒にロープウェイで登り、そこで別れてハイキング開始(11:30)。砂礫の急な道を一旦、ロープウェイの中間駅のプラン・プラツ(2000m)まで下り、そこからコルヌという稜線上のコルを目指して登る。この登りが予想以上に長くハードに感じられた。コ

ルからは稜線上の道を進んだが、途中で道を間違えた。左下にコバルトブルーの大きな綺麗な池が見えたので、コースはその池の畔を通っているものとばかり思い込んで稜線から下つてしまつた。池まで降りて池に沿つてしばらく行くと、道が消えてしまつて間違いに気付いた。再び稜線まで登りなおしたが、約1時間半ロスをする羽目となつた。その後は稜線上を忠実に歩きアギュール・ポーリエといいうコルからロープウェイ駅のフライジエール（1894m）に降る。そこからはロープウェイでイとバスを乗り継いでシャモニーに戻つたが、ホテルに着いたのは19時過ぎとなつてしまつた。

8月31日 晴れ

シャモニー谷には、モンブラン山群を眺める展望台として主要なものが三つある。エギュウ・ドゥ・ミディとブレバンとグラン・モンテである。既に前の二つの展望台には行つたので、この日は残つたグラン・モンテの展望台に登つて、そこからアルジヤンチエール氷河を下つてみることにした。

女房と一緒にバスでアルジヤンチエールまで行き、ロープウェイでグラン・モンテ（3275m）に上がる。そこでまた昨日までとは違つた角度からモンブランの展望を楽しんだ後、展望台から急な階段を下つて岩場に下

リアルジヤンチエール氷河に下りようとした。が、降り口の岩場が急で危険を感じる。後からヘルメットをかぶりザイルを持つたパーティが来たので見てみると、ザイルを取り出し始めるではないか。これを見て氷河に下りるのは無理と諦める。階段を上り返して展望台に戻ると、まだ女房がレストランでお茶を飲んでいたので、一緒にロープウェイで中間駅のロニアン（1972m）まで下り、そこから歩いてバス停まで下ることにした。

道は、ジープが通れるくらいの広い砂利道で展望もそれ程無いので、人気がないと見えて、下まで誰にも会うことはなかつた。予定していた氷河歩きはできなかつたが、静かなハイキングが楽しめたので、ある意味では良かつたと自ら慰める。

（ヴァリス山群）

9月1日 曇りのち雨

シャモニーから電車でツェルマットに移動する。事前に時刻表で調べてみると、途中3回も乗り換えるのでちょっと心配したが、スイスの鉄道は正確で、ほぼ予定通りの時間でツェルマットに着くことができた。ツェルマットは、ヴァリス山群の中心の観光地で、街中からマッターホルンが見えることで有名なせいか、雨にもかかわらず駅前の人々

インストリートは、欧米の観光客の他に中国人、韓国人、日本人の観光客などで賑わっていた。

9月2日 雨のち曇り

朝のうち雨が降つていたのでしばらくホテルで待機、雨の止むのを待つて、女房と一緒に登山電車で有名な展望台のゴルナーグラート（3089m）へ行く。ゴルナーグラートまで登ると雲の上に出て、モンテローザ（4634m）やマッターホルン（4478m）が姿を現した。天気も回復して来たので歩いてツェルマット（1620m）まで下ろうかと思ったが、この日は風邪気味で体調も悪かつたので止めて、ゴルナーグラートの周辺を散歩した後、女房と一緒に電車でツェルマットに戻つた。

9月3日 曇り後雨

ロープウェイを乗り継いでマッターホルン・グレイシャー・パラダイス（3883m）まで上がつて雪と氷の展望を楽しんだ後、中間駅のシュヴァルツゼー（2583m）まで戻り女房と別れてハイキング開始（12:30）。牧草地の中の道を犬を連れた中年のスイス人女性ハイカーと相前後しながらシユタツツェルマットは、ヴァリス山群の中心の観光地で、街中からマッターホルンが見えることで有名なせいか、雨にもかかわらず駅前の人々

出したが、道は緩い森林の中の道なので、傘をさし雨を楽しみながらゆっくり歩いて、16:30 ツェルマット（1620m）に着いた。

9月4日 晴れ
地下ケーブルカーとロープウェイを乗り継いでロートホルン（3103m）まで行き、そこからハイキング開始（10:35）。まずオーバーロートホルン（3415m、頂上には雪があった）に登る。その後はひたすら下るのみ。フルーエ、スネガー、フィンデルンを経て、ムオタス・ムラーユからセガンティーニヒュッテへ行く途中で



ムオタス・ムラーユからセガンティーニヒュッテへ行く途中で

由して、ツェルマットまで下る（17:35 着）。女房はこの日ツェルマットからベルンへ行きベルンで1泊した後、ジュネーブから帰国。

（ベルニナ山群）

9月5日 曇り時々雨

ツェルマット→サンモリッツ間には、車窓からスイスの雄大な景色が眺められることで有名なグレイシャー・エクスプレス（氷河特急）というパノラマ列車が走っている。これに乗りサメダンまで行き（乗車時間約8時間）ベルニナ線に乗り換えてポントレジーナという駅で降りる。ポントレジーナはサンモリツツから2駅イタリア方向に行つた小さな町であるが、サンモリツツよりもホテル代が安いうえ、ベルニナ山群のハイキングを楽しむには、交通の便もサンモリツツよりも良いので、ここに宿を取る。

9月6日 晴れ

バスとケーブルカーを乗り継いで、ムオムタス・ムラーユ（2453m）まで行つてハイキング開始（11:10）。途中のセガンティーニヒュッテ（2731m）でビールと昼食を取り、アルプ・ランガード（2330m）を経てポントレジーナ（1805m）へ下る（15:40 着）。このルートは、ベルニナ谷の対

岸からベルニナの主要な山々が眺められるコースで、終日ピツツ・ベルニナ（4049m）やピツツ・パリュウ（3900m）などを眺めながらの気持ちのいいハイキングが楽しめた。また、コースの上方には昨日降ったと思われる雪が積もっていて、新雪を踏んで歩けるのも良かつた。

9月7日 晴れ

展望台で有名なピツツ・コルヴァチュ（3303m）までロープウェイで行つて、ベルニナ山群の大パノラマの展望を堪能した後、中間駅のムルテル（2702m）まで戻つてハイキング開始（11:00）。まずピツツ・ベルニナが間近に見えるスールレーユ峰（2755m）を目指す。峰には予想よりも早く着き、峰のヒュッテでビールと景色を楽しむ。峰からポントレジーナに直接下る道もあるが、時間があるのでサンモリツツまで歩いてみることにした。登つて来た道を少し戻り、途中から標識に従いサンモリツツに向つたが、このルートは人気が無いせいか、誰にも会うことなくサンモリツツに着いた（15:40）。

9月8日 晴れ

もう一つの展望台のデアボレツツアに行くつもりでバスに乗つたら、バスが国境を越えてイタリア迄行くことが分かつた。バスの中でふとイタリア側に行つて南側からベルニナ

の山を見るのもいいかなと思つて、ロープウェイ駅で降りるのを急遽止めて、そのまま終点まで乗り続けることにした。バスは峠を二つ越えて約1時間半かかつてリヴィーニョという街に着いた。そこはスキーリゾートであり大きな街であった。冬はスキー客で賑わうとみえて、高級ホテルやブティック、立派な教会などもある。但し周りに雪の山は全く無い。ハイキングをしようにも適当なコースも無いので、折り返しのバスで戻ることにしたが、出発時刻まで2時間もある。街はずれの遊歩道を散策したり、街中をぶらついたりして時間をつぶして、ようやく来たバスでディアボレツツアに登るロープウェイ駅まで戻つた。

そしてロープウェイでディアボレツツア（2978m）まで上がつたが、展望台に着いた時は既に15時を過ぎていた。ここから当初予定していたベルニナ線のディアボレツツア駅まで歩いて下るには時間がない。どこか歩くに適當なところは無いかと見回したところ、少し先に1時間位で登れそうなうつすらと雪をかぶつたピークが目に入った。トレスもはつきり見えるので、そこに登つてみることにした。50分で頂上に着いたが、頂上には時間も遅いし誰もいないだろうと予想していたところ、一人のスイス人の老ハイカーが

いて、頼みもしないのに周囲に見えるピークを、一つひとつ指さしながら名前を教えてくれた。見ると老ハイカーのザックの脇には、500mlのビールの空き缶がころがつていたので、すこし酔つていたのかもしれない。寒いので10分足らずで頂上を後にしたが、彼は日の傾きかけた頂上に一人残つていた。

（ベルナー・オーバーラント山群）

9月9日 曇り

ポントレジーナからスイス国鉄でグリンデルワルトに向う。途中サメダン、クール、チューリッヒ、ベルン、インターラーケンと5回も乗り換えなければならなかつたが、ファーストラゲッジというシステムを使って大きな荷物を事前にグリンデルワルトの駅に送つてるので、サブザック一つだけ持つての移動だつたので楽であった。このファーストラゲッジというシステムは、乗り換えの多い場合や途中下車して観光する場合などに大変便利である。夕方グリンデルワルトに着いたが、グリンデルワルトもツェルマットと同じく中国人、韓国人、日本人の観光客が目立つた。

9月10日 曇り時々雨

憧れのユングフラウヨッホ（3454m）に行つてみた。アイガーの山腹をくり抜いた

トンネルを通つて3000mの山の上まで鉄道が運んでくれるわけだが、乗つているだけで難工事のほどが偲ばれ、よくも鉄道を敷いたものだと感心させられる。また、途中の停車駅では、アイガー北壁のど真ん中の窓から北壁が覗けるようになつたりして、兎に角、興奮させられる。また、車内放送（驚くことに日本語）で、このトンネル工事が1895年（明治28年）に始まつたと、言うのを聞いてさらに驚く。

山頂の展望台でユングフラウ（4156m）やメンヒ（4099m）、アイガー（3970m）等の展望を堪能した後、電車でトンネルの出口のアイガーブレッチャーレー駅（2320m）まで戻り、ハイキング開始（11:15）。雲の中をクライネシャイデック（2061m）まで下り、そこからアイガーブ壁の真下をトランバースしてグレンント（948m）に下るルートに入る。この日は雲の動きが激しく、ハイキング中、アイガーブ壁が全貌を現すということは無かつたが、それでも右手目の前に常に北壁が迫つてゐるので、その迫力は十分に感じられた。途中で雨が降り出し遠くに聞こえていた雷鳴が急に近付いてきたので、危険を感じ慌ててアルピゲレンの駅に避難した。雷が近くで鳴り出し“ヤバイ”と感じた時、たまたま「Alpiglen 10min」という標識が目に

入ったので、雷や雨がそれ程激しくならないうちに駅に駆け込むことができたが、後から駆け込んできた人々は、必ず濡れで恐怖に顔を強張らせている者もいた。小さな駅舎はたちまち駆け込んできたハイカーで一杯になつたが、そのうち雷鳴も遠ざかり登山電車も来たので、それに乗つてグリンデルワルトに戻つた。

9月11日 晴れ

バスでグロッセ・シャイイデック（1986m）まで上がりハイキング開始（10:30）。フィルスト（2168m）、バッハルゼー（2655m）小さな湖あり）、フェルドを経由してグリンデルワルト（1034m）まで歩く（16:55着）。この日は天気も良く終日、ヴァッターホルン、シュレックホルン、アイガー、ユングフラウなどベルナー・オーバーラント山群の主要な山々眺めながらのハイキングが楽しめた。

9月12日 晴れ

この日がハイキングができる最後の日なので、山群を代表するロングコースに挑んでみることにした。泊まっているホテルのすぐ上にあるリフト乗り場からチエアーリフトで直接フィルストまで上がり、歩き出す（9:15）。バッハルゼーまでは昨日と同じ道を行き、そこから分かれてファウルホルン（2686m、

頂上にホテルがあるので有名）を目指して登る。約400mの登り。ホテルのテラスレスローンでビールと抜群の展望を楽しんだ後、ヴェーバー小屋に向う。約1時間でヴェーバー小屋に着き、またまたビールを給油した後、ひたすら歩いてシーニゲプラッテ（2068m）の登山電車の駅へ出てハイキング終了（16:10）。このコースは、尾根道あり山腹を巻く道あり牛の遊ぶ草原の中の道ありで、変化に富んでいるほか、眺望も抜群で（ベルナー・オーバーラントの主要な山々の他にインターラーケンの街やトゥーン湖まで見晴らせる）、ハイキングの最後を飾るコースとしては相応しいものであった。

9月13～14日

グリンデルワルトからジュネーブ空港へ向かう。飛行機は夜の便（20:25発）なので、途中下車してインターラーケンで約2時間、ベルンで約4時間街中を観光する。ベルンは街全体が世界遺産に登録された街だけあって一見の価値あり。ジュネーブからはエアーチャイナで北京経由羽田に帰る。

十勝連峰トムラウシ縦走

中村 雅明（昭43年卒）

メハバー・中村雅明、中村航（長男・42歳）
行程：7月8日 羽田（6:45）—旭川空港（8:25～40）—旭川（9:10～11:33）—上富良野（12:25～12:49）—バーデンカミフルの（13:14）

が、これが良かったと思っている。ホテルも最初のジュネーブだけ日本から予約を入れたが、後は現地に着いてから探すということでも全く問題なかった。また、スイスは、どの山群にもハイキングコースが沢山あり、そのうえ鉄道やバスが発達しているので、広い地域から選り取り見取りで日帰り可能なコースが選べる。ホテルやインフオメーションセンターで簡単な地図付き案内書がもらえるし、コースには標識が整備されているので、事前に調べておく必要もほとんどない。兎に角、気楽にハイキングが楽しめるので、お勧めです。

7月9日 ベーテンかみやの (4:30) — 凌雲閣 (5:00) — 安政火口分岐先 (5:30～45)
上ホロ分岐先 (6:32～40) — 富良野岳稜線
分岐直下 (7:28～37) — 富良野岳稜線分岐
(7:40～45) — 富良野岳 (8:15～25) — 富良野岳稜線分岐 (8:43～50) — 11峰山手前
(9:38～58) — 上富良野岳 (10:46～11:20)
— 十勝岳温泉分岐 (11:25) — 上ホロカメツ
トク (11:35～38) — 十勝岳温泉分岐
(11:47) — 上ホロカメツトク避難小屋
(12:17)

7月10日 上ホロカメツトク避難小屋
(4:32) — 十勝岳 (5:29～43) — 美瑛岳登
山口 (6:32～40) — 美瑛岳手前 (7:20～30)
— 美瑛岳分岐 (8:00) — 美瑛岳 (8:22～
28) — 美瑛岳分岐 (8:43～9:00) — 美瑛
富士分岐 (9:31～45) — 美瑛富士 (10:19
～15) — 美瑛富士分岐 (10:26～35) — 美瑛富士避難小屋分岐 (11:05～10) — 石垣
山先 (11:50～12:00) — ぐく岳先 (12:30
～40) — オプタテシケ山手前 (12:53～
13:10) — オプタテシケ山直下オプタテシ
ケ (14:18～25) — 双子池キャンプ指定地
(16:35)

7月11日 双子池キャンプ指定地 (4:48) —
カブト岩手前 (5:32～41) — 1668m峰
(6:21～39) — ロバーブリ先 (7:26～35)

—シリガネ山手前 (8:20～25) —シリガ
ネ山先 (9:15～30) —シリガネ山下り
(10:10～18) — 1507m峰先 (10:58～
11:05) — 1113m峰手前 (11:39～11:45) — 三
川印先 (12:15～21) — 南沼手前 (13:01～
20) — 南沼キャント指定地 (14:45)

7月12日 南沼キャンプ指定地 (4:47) — ム
ラウシ公園 (5:37～45) — 前レバ平 (6:15
～25) — ロマドリ沢手前 (6:58～7:05) — ロ
マドリ沢分岐 (7:20～30) — 尾根への登り
終了 (7:55～8:05) — 田道との分岐 (8:58)
— カムイ天上 (9:10) — 温泉コース分岐
(9:42～55) — 3.2ドムラウシ温泉
(11:36)

7月13日 東大雪莊 (9:50) — 新得駅 (10:50
～11:06) — 帯広 (11:36～12:40) — ヒカ
チ帯広空港 (13:40～15:50) — 穂田 (17:30)

2010年7月8～14日大雪連峰(黒岳、
ムラウシ山)を長男と2人で縦走しました。
トムラウシ山頂上で見た十勝連峰、ひとときわ
連峰の盟主十勝岳の秀麗な姿が印象的でした。
また、南沼からオプタテシケ山に続く緑
溢れるゆるやかな稜線もいずれ歩きたいと思
いました。それから5年、長男に十勝連峰、
トムラウシ南沼までの縦走を呼びかけまし
た。長男にとって大雪連峰縦走が良かつたの

でしょう。即、話に乗りました。十勝連峰の
縦走の起点として最初は富良野岳登山口から
原始ヶ原湿原を経て富良野岳に登るコースを
考えました。縦走コースとして完璧、原始ヶ
原が魅力的だったことからですが、登山口ま
でのバスの便がないこと、宿泊場所がないこと
とからこのコースを断念し、十勝岳温泉を起
点としました。十勝連峰は大雪連峰と違つて
避難小屋が少ないのが難点です。縦走の初日
は十勝岳の手前の上ホロカメツトク避難小屋
に泊ますが、その先の双子池、南沼はテ
ント泊となります。天気が悪い場合は十勝連
峰の縦走で打ち切ることにしました。昨年9
月の御嶽山噴火以来、火山の活動が活発にな
り、活火山である十勝岳を心配しましたが、
噴火警戒レベルが2(火口周辺規制)から1
(平常)に下がったことを小野先輩から伺い実
施することにしました。出発直前に調べた天
気予報で、十勝岳方面は好天が続く予報に意
を強くして東京を発ちました。

● 7月8日(木) 晴れ 「入山」

旭川行エアドゥ第1便 (6:45) で羽田を出
発、8:25に旭川空港着。1階到着ロビー総合
案内でガスカートリッジ2個を購入し、直ち
にリムジンバスで旭川駅に向かいました。旭
川駅から上富良野駅まで富良野線で移動、車
中は中国人観光客が殆どです。上富良野駅前

から町営バスで12:49十勝岳温泉へ。約40分で“バーデンかみふらの”で下車。バス停の前から富良野岳、三峰山、上富良野岳が良く見えます。終点の凌雲閣（十勝岳温泉登山口がすぐ近く）に泊まりたかったのですが、4月時点での満室だったので徒步約1時間下の“ヒュッテバーデンかみふらの”が今晚の宿です。鉄筋2階建ての山小屋風の大きな建物で、にぎり湯の露天風呂が快適でした。夕食は富良野地域ではここでしか食べられない“ふらの和牛”を使用したステーキを美味しく食べました。夕食時から中国人の学生グループ、家族づれが続々到着し、宿泊者の殆どが中国人でした。凌雲閣が満室で取れなかつたのもおそらくこの為かと推測しました。明日は早立ちなので早々に就寝しました。



十勝岳を背に火山礫の道を下る

●7月9日（金） 快晴【縦走1日目】

3:30起床。昨日、コンビニで買ったおにぎり、パンの簡単な朝食を済ませ、4:30に宿を出発しました。空は晴れ上がり雲一つありません。60Lのザック一杯の荷物の重さは20kgで久し振りに肩に食い込みます。宿の横から樹林の中に作られた翁地区遊歩道に入つて凌雲閣に向かいました。ガイドブックに載っている案内板は無く、道にも草が生え、最近は歩く人が少ない様です。カミホロ荘を過ぎ少し上った所で車道に出ました。展望は良いものの山道より遠廻りになることを覚悟して歩いていると、自家用車が止まり「どうぞお乗りください」と声をかけられました。有り難く便乗したお蔭で、コースタイムの半分の30分で凌雲閣の駐車場に着きました。登山口（1280m）からしばらく幅広い砂利道が続きます。三段山分岐を過ぎ、緩やかな登りを進んで、ヌッカクシ富良野川へ下つて対岸に渡り斜面を登った処が安政火口入口。ここから三峰山、上ホロカメットク山が良く見えました。ここからは山腹の道を辿り2p

しく食べました。夕食時から中国人の学生グループ、家族づれが続々到着し、宿泊者の殆どが中国人でした。凌雲閣が満室で取れなかつたのもおそらくこの為かと推測しました。明日は早立ちなので早々に就寝しました。

●7月9日（金） 快晴【縦走1日目】

3:30起床。昨日、コンビニで買ったおにぎり、パンの簡単な朝食を済ませ、4:30に宿を出発しました。（往路…30分、復路…18分）。富良野岳は“花の百名山”の中でも高山植物が豊富な事で有名です。富良野岳に登る道脇の斜面にチングルマ、ハクサンイチゲの見事な群落が広がります。登るにつれてエゾコザクラ、エゾノツガザクラ、チシマキンバイ、ハクサンチドリが次々に現れ、かなり急な登りも気になりません。8:15富良野岳山頂（1912m）に到着。登山口から3時間15分、縦走の最初のピークです。人気の山だけあって狭い頂上は登山者が溢れています。十勝連峰の南端でしかも天気は快晴、360度の大展望を楽しみました。北方には手前の三峰山から上富良野岳、上ホロカメットク山、十勝岳と十勝連峰が続きます。左遠くには大雪連峰、右遠くには石狩連峰が連なります。東には十勝岳連峰から分岐して境山、下ホロカメットク山へ続く優美な山並み、その遠方にはニペソツ山やウペサンケ山。南西眼下に頂上から前富良野岳に続く稜線、南麓に緑の針葉樹林帯が広がり、その中に草地、池塘、真っ白な

雪田が点在する原始ヶ原を見下ろします。その奥に夕張岳、芦別山が聳えます。北西には増毛山地の暑寒別山も見えます。これ以上ない展望に満足して富良野岳温泉分岐に戻りました。勿論、帰りも花をたっぷり楽しめました。

分岐からいよいよ稜線歩きです。三つのピークを持つ三峰山を越え、10:46 上富良野岳（1896m）に到着。分岐から2時間。かなりの登りでしたがチングルマ、アオノツガザクラの群生に慰められました。頂上からは十勝岳の姿が大きく見えます。振り返ると先ほど登った富良野岳が大きく聳え立派です。頂上には昼夜に最適な岩があり、そこに寝転ぶと寝姿と三峰山から富良野岳がそっくり入った良い写真が撮れました。

頂上から少し下った十勝岳温泉分岐から10分の上ホロカメットク山（1920m）を往復。頂上から見る安政火口の荒々しい山肌は迫力満点です。この頂上からは十勝岳がより近く、より大きく、富良野岳がより遠くに見えます。遠方には石狩連峰が連なります。分岐からトラバース気味に下り、上ホロカメットク頂上から下る尾根を乗越して沢に下り、少し上った台地に建つ上ホロカメットク避難小屋（以下上ホロ避難小屋）に12:17 着きました。このコースも花が豊富で分岐から

の斜面で見たハクサンコザクラ、エゾノツガザクラ、チングルマの群落、避難小屋近のキバナシヤクナゲが見事でした。小屋は鉄骨木造2階建て、収容人員30名の正方形のこぢんまりしたものです。外部の木部は相当老朽化していますが、内部はまだ傷んでいません。2階の冬期入口近くに陣取りしました。まだ早い時刻なので同宿者は1階に3人、2階に単独行の2人でした。その1人は黒岳から大雪連峰を縦走して来たとの事、2年前に山を始めたばかりなのに大変な縦走をしていると敬服しました。途中、南沼でテントが飛ばされるとほどの強風雨で死ぬ思いをしたとの話に驚きました。1日南沼で停滞した後、昨日美瑛富士避難小屋に移動し、今日この避難小屋に来たそうです。3時半頃8人パーティが到着。ガイド、ポーターは小屋前のテント、女性6名が2階に陣取り賑やかになります。16時頃から夕食の準備。水は小屋から100mほど下がった雪渓から得られます。本日の献立は尾西の五目ご飯十にゆうめん、キユウリトミソ、ミニトマト、フルーツゼリーです。最近の山の食料は軽くてお湯だけで仕上がるるので調理は簡単です。明日は早立ち予定なので早めに就寝しました。

●7月10日（金） 快晴 「縦走2日目」
3:20 起床、4:32 上ホロ避難小屋を出発。今

日も雲一つない快晴に心弾みます。小屋から少し登ると稜線。正面に十勝岳を見ながら火山灰と砂礫の道を進みます。大砲岩よりさらには進むと岩礫の尾根が広がっています。徐々に傾斜を増していく急斜面を登り切って5:29十勝岳（2077m）頂上。小屋から約1時間。早朝の頂上から360度の大展望を満喫しました。北西にはこれから歩く美瑛岳までの稜線、その奥に旭岳からトムラウシまでの大雪連峰が連なります。ひときわトムラウシに目を奪われます。南東には上ホロカメットクから境山へ下ホロカメットクに緑の稜線が続いています。その右手（南西）には昨日歩いて来た富良野岳へ三峰山へ上富良野岳へ上ホロカメットクの稜線が足元まで続いています。富良野岳の背後には夕張岳と芦別岳。その右奥に日高連山が望めます。足元（西側）の前十勝岳付近では、新火口（62-II）から盛んに白い噴煙が上がっています。15分存分に展望を楽しみ、5:43 美瑛岳に向かいました。十勝岳の下りも草木一本の無い砂と岩のみの道です。平ヶ岳付近の道は北インドのザンスカール山地を思い出しました。鋸岳の直下を大きく巻いて下る途中で見上げた山肌が中国西域の火炎山の山肌にそっくりです。爆裂火口の縁を回り込んだ辺りからイワウメやエゾノツガザクラのお花畠が現れ、目を楽しませ

ます。十勝岳が後方どんどん高くなり、目の前にはオプタテシケ山とその奥にトムラウシ山が広がります。下り終わったコルで小憩後、美瑛岳へ1時間半登り返し、8:00に美瑛岳分岐。美瑛岳頂上は縦走路から離れています。ザックを置いて爆裂火口縁の斜面道を20分ほど登つて美瑛岳（2052m）に到着。イワウメ、チングルマが足元の登山道脇に咲いていました。十勝岳とほぼ同じ高さなので山頂からの展望が見事です。南方随分遠くに十勝岳がすつきりした三角形で聳えています。十勝連峰の盟主の風格十分です。その右奥に富良野岳。今までは十勝岳の左側に見ていましたが左側に変わります。歩くにつれて展望がどんどん変わっていくのが縦走の醍醐味です。北方の眼下に美瑛富士、その右手からオブタテシケ山に続く緑の稜線、さらにその奥のトムラウシ山の眺めも存分に満喫しました。美瑛岳分岐に戻つて1回目の昼食。今までおにぎりが食べられます。出来上がるとなぜか三角形なのもご愛敬です。パンと違つて水気があるので昼飯には最適です。“ウーン。これは良い。これからいつものようにしよう”と2人の意見が一致しました。美瑛富士分岐から岩ガラガラの急斜面を

300m下つて美瑛富士分岐へ。この長い下りで長男の足の痛みが増し、私に遅れること15分。5年間に痛めた足首の靱帯が完治していないなかつたそうです。長男は分岐で休憩。美瑛富士（1888m）へは私一人で往復しました。縦走の重荷から解放された空身なのでコースタイムの半分以下で往復しました。美瑛富士からは南に美瑛岳、北にオプタテシケ山を近くに望みます。登山道にはチングルマ、エゾノツガザクラの群落が見事でした。美瑛富士分岐からは美瑛富士の山肌の巻き道を30分行き、美瑛富士避難小屋避難小屋分岐に出ました。途中、ショウジョウバカマ、エゾヒメクワガタを見つけました。ここからオブタテシケ山に向かつて登りが続きます。登り始めに岩陰に1人で休んでいる登山者に会いました。今日は双子池から来たとの事で、テント場、水場を教えてもらいました。石垣山へ登る途中で眼下に美瑛富士避難小屋が見えました。小屋の前で宿泊者が2人で話していました。石垣山、ベベツ岳とアップダウンを繰り返しオブタテシケ山の登りにかかりました。最後の急登に息を切らしました。14:18オブタテシケ山（2012m）に到着。美瑛富士避難小屋分岐から3時間強。ほぼコースタイムですが、夏の日差しに照らされての急登は堪えました。オブタテシケ山は十勝連峰

の最北端、来し方を振り返ると美瑛岳がどうし構え、その後ろに盟主十勝岳が高く聳えています。北方を望むと双子池に下りる尾根の先にコスマヌプリ、ツリガネ山、三川台が続き、さらにトムラウシ南沼になだらかに登る“十勝岳オブタテシケ山縦走コース”が一望出来ます。南沼の上方に「荒々しい岩峰を牛の角のようにもたげた（深田久弥）トムラウシが屹立しています。十勝連峰の南端の富良野岳から北端のオブタテシケ山までの縦走を終えた満足感に浸つてゆっくり休憩した後、14:35双子池へ向かつて“後は下るだけ”と気楽に下り始めました。ところがこれは大きな間違いで大変な下りが待っていました。少し進んだビーグから眼下の双子池まで標高差600mの激下りが始まりました。急な岩ごつごつした斜面に足を置いて下るのは大変でした。足を痛めている長男にとつてはつらい下りです。半分ほど下つたところから急な雪渓が現れました。年によつては軽アイゼンが必要な危険な雪渓ですが幸い雪渓脇を下る事が出来ました。長男は一步二歩足を置きながらの下りなので時間がかかります。振り返るとオブタテシケがどんどん高くなりますが、逆コースでとても登る気になりません。コースタイム1時間30分のところ2時間かけてようやく下り終えました。

テント場は雪渓が切れた台地脇の池塘跡の窪地です。地面が乾燥状態、窪地なので風がテントの上を吹き抜ける絶好の場所でした。水もすぐ近くの雪渓から得られます。テントは石井G-LIGHT X2～3人用。昨年白山で使用した時は3人で窮屈でした。今回は2人なのでゆったりしています。今晩の献立は、白米＋カレー、ポタージュスープ、キユウリ＋みそ、ミニトマト、フルーツゼリー。長男の疲れが心配でしたが食欲があつたので安心しました。明日も早出なのでこの日は早く就寝しました。

●7月11日（土）快晴 「縦走3日目」

3:00起床、4:48双子池キャンプ地を出発。今日も快晴。小屋泊と違つてテント撤収に少し時間がかかります。双子池はテント場から少し下つたところにありますが、縦走路から離れており、池まで行く道も見当たりません。背丈以上ある笹原が見通しの利かない灌木とハイマツの中の道になり登りにかかります。45分登つていやになつた頃巨岩トンネルを通り抜けるカブト岩に到着。見通しは良くなりました。ここから広く緩やかなハイマツの尾根を登ると1668m峰。この頂上は北西面が切れ落ちているので硫黄沼～三川台～トムラウンシ山までが一望できました。ここからはコスマヌプリ肩、1591m峰、1558

m峰、ツリガネ山（1708m）西肩へとアッパダウンを繰り返してハイマツと灌木の縦走路を進みました。ところが長男の足の調子が悪化しくありません。昨日痛んだ右足をかばつて無理をしたので左足も痛み出し、下りに極端に時間がかかります。私が先行し長男を待つピッチが多くなりました。日差しも強くなり暑さも堪えます。南沼までまだ遠いので、先が心配になります。三川台付近で幕営するか、私が南沼まで先行しテントを張つた後引き返し長男のザックを私が背負うかなど対策を考えました。ツリガネ山の肩から振り返るとオブタケシケ山が空高く聳えています。“オブタケシケ”はアイヌ語で「槍がそこに反り返っているような」という意味ですが正にそれを実感しました。そこから鎖場も現れる急坂を下つて最低鞍部まで下りました。ここから灌木と笹の急坂1507m峰まで登るとゆるやかな登りが三川台下まで続きます。右手に沼や雪渓を源とするユウトムラウンシ川源流が現れた先の急坂を登つて広い台地の三川台に12:15に着きました。長男は足の痛みを堪えながらの登りでしたが、頑張つたので後の見通しも明るくなり安心しました。三川台という名は辺別川と美瑛川とユウトムラウンシ川の3本の源頭が三方から突き上げている台地状の地形で十勝連峰と表大雪

への縦走路の交差点です。ようやく大雪山域に入りました。三川台から南沼に続く道は縦走のフィナーレを飾る素晴らしいコースでした。左手に広大な黄金ヶ原の湿性お花畠眺め、右下に残雪と池塘が点在するユウトムラウンシ川の源流部を見下ろしながら、トムラウシに一步一歩近づいて行きます。このコースはなだらかですが足元が時々岩礫帯になり、かなり長く続きますが、草原、ミヤマキンバイ、チングルマの大群落、池塘が次々に現れるので疲れを感じません。1時間ほど歩くと次第に傾斜が強まり、ロツクガーデンの様な道を進み、南沼に到着しました。南沼の周囲は雪渓が残り、紺碧の水との対比が綺麗です。小憩後、急な斜面を登り切つてしまふ。14:45南沼キャンプ指定地に着きました。出発してから10時間。長男の足の調子が悪かったのに関わらずテント場に早く着けました。土曜日なのでテント場はかなり一杯でしたが、水場に近い良いスペースが確保できテントを設営しました。テント場は雪渓から雪解け水が豊富に流れる絶好の宿泊場所です。まだ夕刻までには時間があるので濡れた衣類を乾かし、コーヒー＆紅茶を飲んで予定通り縦走を終え、トムラウンシの懐に抱かれた満足感に浸りました。明日は時間を気にしないでトムラウンシ温泉に下山するだけなので安心して



美瑛岳よりオプタテシケ山その奥はトムラウシ山

眠りに就きました。

● 7月12日（日） 晴れ 「下山」

2:25 起床。今日はゆっくりで良かったのですが昨夜早く寝たので早く起きてしまいました。

4:47 南沼キャンプ指定地発。テントを数えると13張ありました。夏山最盛期＆土曜日の為でしそうが、最近テント山行をする登山者が増えた様に感じます。トムラウシ温泉まで5年前と同じコースを下山したので、下山の模様は前回と違つたことのみ述べます。

①コマドリ沢の雪渓は今年の方がずっと長

かったです。②5年前はカムイ天井から先がドロンコ道でうんざりしましたが、今年はずっと好天でしたので水たまりが乾燥して楽でした。道も木道が随分整備されていました。11:36 にトムラウシ登山口へ下山。3泊4日の縦走を無事終了しました。東大雪荘の部屋は5年前は登山者用の大広間でしたが今年は個室でゆっくり休めました。

● 7月13日（月） 曇り時々晴れ 「帰京」

朝から小雨。山行期間中の好天、特に縦走の3日間が全て快晴をお天道様に感謝しまし

た。9:50 の宿のマイクロバス（無料）で新得駅に出て、根室本線で帶広に移動し、帯広空港15:50 発のJAL便で羽田に17:30 着きました。この日は針葉樹会の総会がありましたので羽田から如水会館に直行しました。このおまけで充実した山行を締め括りました。

※今回の縦走で大雪連峰の北端の黒岳から十

勝連峰南端の富良野岳の主稜線を完全トレース出来て大満足です。『針葉樹第15号』に1994年9月5～10日に夏合宿で渕澤さん、吉武さんが旭岳～黒岳～白雲岳～化雲岳～トムラウシ山～美瑛岳を縦走された記録が掲載されています。流石学生さんの山行、テント9泊10日です。悪天の為、あのオプタテシケ山に2回も登っているのに驚きます。

※十勝連峰の高山植物は正直言つて大雪連峰ほどではないだろうとあまり期待していましたが、富良野岳、三川台からの南沼までのお花畑の素晴らしさに感激しました。十勝岳の一木一草のない稜線との対比の妙が有りました。

※北海道中央高地の次なる目標は、今回遠望した石狩岳、ニペソツ山です。ただ、どちらも奥深く入下山に苦労しそうです。

十勝岳・富良野岳行

宮武 幸久（昭45年卒）

7月16日出発の朝は台風11号の影響で雨の中であつたが羽田に着く頃はすでにやんいでいた。日頃の行いの良い方がたは佐々木さん（昭31）を筆頭に小島さん（40）佐藤久さん（41）と私の内地組と札幌の小野さん（40）の会員と、今回は小野さんの山仲間の橋本さんと手塚さんの総勢7名の参加となつた。

橋本さんは内科の女医さんで針葉樹会員とは過去にスキーでご一緒したことのあるとのことで地域限定のビールをはじめ大量の食糧を差し入れていただきました。手塚さんは北電山岳部で小野さんの後輩で今山行では車の運転から献立・買い出し・調理など全てを一手に引き受けくださいました。お二人のおかげで山行が一段と楽しいものになりました。大変感謝します。ありがとうございます。

千歳から富良野のラベンダー畑を経由し連泊することになる十勝岳温泉郷白銀荘に向か

う。白銀荘は富良野町営で自炊専門の1泊2600円ではあるが調理・食事器具がすべてそろつており、何よりも各種の温泉が豊富でなかなか快適なところであった。これに加え持ち込んだ新鮮な肉・魚介類・野菜、そして圧巻なのが20リットル入りの生ビール樽があいまつて連日の「ビール・ふろ・ビール」の毎日となつた。

17日いよいよ十勝岳へ高低差約1000メートルの登山に朝6時半出発。歩き始めて間もなく標高1100メートルぐらいだろうか這松帯が現れ、さすが北海道の山らしさを感じられた。望岳台からの道に合流、十勝岳避難小屋を過ぎるころは火山礫を踏みしめるようになり、1ピッチで200メートルを稼ぐ快調なペース。

十勝岳往復の案もあつたが十勝岳を越えて上ホロカメツトク岳・上富良野岳経由凌雲閣までの周遊コースと決め、噴煙の中を一路十勝岳へ。11時十勝岳2017m頂上に到着。眺望もよく、遠くは重量感あふれる旭岳、ピーグが二つに割れている特徴的なトムラウシ山、近くは富士に見えるが美瑛富士でないよと教えてもらった美瑛岳など、大雪山塊を見渡すことができた。その後、富良野町・美瑛町の田園風景を見ながら稜線歩き。手塚さんの実家がやっているかぼちゃファームが見

えている。奥深い北海道の山々の中でアプローチの手軽さがこの辺の人気の高さの理由なんだろうとも思う。

このころからやや下向き加減の歩行になり上ホロカメツトク岳は「一も二もなく巻く」として上ホロ避難小屋へ。ここで今までの景色が一変し、まさしく一面のお花畠と雪渓からの冷たい水に出会えて元気を取り戻す。その後、上富良野岳より急坂を下山開始。道中は佐々木さんに教えてもらう「今標高何メートルだ」との掛け声に一喜一憂しながら、明日登る富良野岳への分岐点・安政火口を経由して16時15分、十勝岳温泉凌雲閣に到着し、約10時間のアルバイトを終了。昨日のうちに回しておいた手塚車で白銀荘へ。そして「ビール・ふろ・ビール」

18日やや曇りの中富良野岳登山口の凌雲閣へ。凌雲閣前の駐車場はすでに満員で路肩に駐車する。凌雲閣はいまも定期バスの終点で昔からの登山の拠点だったようだが、現在は外国人の旅行客で予約を取るのがなかなかむずかしいとのこと。6時40分、標高差約700mの登山開始。分岐まで昨日の道、今日も快調のペース。途中の安政火口は大雨で土砂が埋まり一時不通になつたとのこと。7時45分分岐点。ここから富良野岳へは昨日と違つて背の低い樹林帯の中を頂上近くまでを

歩く。佐薙さんの年齢を聞いてびっくりした若いカップルと最後まで抜きつ抜かれずのペース。9時40分に稜線に。やや曇りがちだったがこの時は晴れて、昨日の十勝岳が秀麗な三角錐を見せてくれた。頂上までは高山植物の連続。そして10時半富良野岳1911メートル頂上着。さすがに登山客も多く人気の高さをうかがわせてくれる。大雪山塊との別れを惜しみつつ下山開始。下山は来た道を分岐・安政火口を経由して凌雲閣へ。凌雲閣



十勝岳にて。
左から、小島、宮武、橋本、佐藤、佐薙、小野、手塚の各氏

着14時30分。白銀荘へそして最後の「ビル・ふろ・ビール」。

19日は帰京日、2～3の観光地をご案内いたしましたが渋滞を避け旭川経由で無事千歳空港へ。札幌組の至れり尽くせりのご配慮に再度

感謝します。本当にありがとうございました。

最後に、聞くところによれば会の北海道シリーズも名峰を登りつくし一応の節目を迎えたとのことですがまだまだ一緒に締めたいと思っていますのでよろしくお願ひします。



富良野岳山頂

中村慎一郎君遭難慰靈碑を探して （三度目の正直で発見）

松尾 信孝（昭48年卒）

1968年5月北アルプス鹿島槍天狗尾根にて遭難死した中村慎一郎君の遭難慰靈碑は、麓の大谷原から大川沢左岸を遡った地点に建立された。

一昨年（2013年）5月アダージオ懇親山行のあと、しばらくぶりに有志で追悼しようと訪れたものの、上流（荒沢出会いの下流）に堰堤が造られ、その工事のために右岸にトルツク道が造られたため周辺の地形が大幅に変わってしまったことと、雪解けで増水した大川沢を左岸に徒渉するのが困難であったため、慰靈碑の場所を特定できなしま、対岸の林道から追悼した。

昨年（2014年）11月、大川沢の水量が一番少ない時期を見計らって松尾が単身で營林署跡辺りから廃道となつた左岸の道をたどつて記憶を頼りにそれらしき場所を探しながら堰堤まで遡るも、発見できなかつた。（以

上2回の探査行は一橋山岳会ホームページに掲載済み)

以上の結果から、次は水量の少ない秋に複数人で探そうと、去る10月7日再々度の慰靈碑探しとなつた。前夜川上村の藤原山荘泊の中村（雅・昭43）、藤原（昭44）、宮武（昭45）と、前日までの日野町議会の委員会を済ませて夜中に蓼科帰着の松尾が中央道原パークリングエリアで合流して大谷原へ。

まだ10月初めのせいか大川沢は思つたより水量が多く、徒渉はできなくはないがむしろ大ゴ沢が思つたよりおとなしく見えたので、出会いのすぐ下流にある作業用の橋を左岸に渡り、大谷原へ。



中村慎一郎さん慰靈碑

岸に渡り、大ゴ沢を2、3歩ざぶざぶと徒渉して、ようやく念願の大川沢左岸の元登山道にとりついた。そこからおよそ10分で営林署跡。当時は大谷原からしばらく右岸添いに辿つてこのあたり吊橋で左岸に渡っていたと記憶する。そこからさらに15分ほどササをかき分け時々残る元登山道を辿ると、なんとか記憶にある場所に行きあう。そこで各人の記憶の細部の違いが現れる。慰靈碑は沢沿いで沢底から1~2メートルのところにあると記憶している者もいれば、元登山道から5メートルほど入った川を望む崖の上にあると記憶している者など。しばらくして藤原さんの「あつたぞー」の声が。藤原さんは忠実に沢沿いの崖の上をたどつたのだ。ただそこは沢底からは20メートル近くも上の崖の上、元登山道からは30メートルほど入つたところであつた。

ともあれ3度目の正直でようやく見つけた慰靈碑の前で、線香をあげ、持参の花とビールを供えて山讃賦を手向け故中村慎一郎君を慰靈した。しばらく当時の部活動のことなどの話ををして弔いとし、一同これでようやく肩の荷を下ろした思いで来た道を大谷原に戻つた。大谷原から見上げる鹿島槍は、秋晴れの雲ひとつない青空を背景に「うつつかゑまひする」かのような山讃賦の世界であつた。

初秋の妙高山

加藤 博行（昭51年卒）

九月六日、我々九人は早朝五時前から夕方五時近くまで、約一二時間に亘る妙高山（二四五四メートル）登山を終え、燕温泉に戻り、ずぶ濡れの雨具と服から解放されて、熱めの温泉に頭から浸かつて立つて、立ち込める硫黄泉の匂いで満たされながら、長かつた今日一日の登山路を振り返り、全員無事登らせてくれた故郷の山に感謝した。

懇親山行「越後シリーズ」

五月連休明けに、佐藤（久尚）さんより、三井さんが長く続けてこられた「越後シリーズ」の地元幹事を引き受けるようメールで依頼が来たことが、きっかけだった。

昨年は、私のいる地元三条の栗ヶ岳登山を五人の会員にご案内したが、暑さで途中ギブアップとなり、おまけに蛭にかみつかれ、何人かが血まみれになつた。弥彦温泉に泊まり、翌日の弥彦山登山を期したが、こちらも雨天

中止で皆さん散々だったことから、幹事の要請は少し気が重かった。

今度こそ東京から来る諸先輩方に何としても越後の山に登頂して帰つてもらいたいと思う反面、山によつては足並みがそろわざ、全員に満足のいく山行プランは容易ではない。

最初の案は柏崎西方にある端正な米山（九八三メートル）にのんびり登つて佐渡を遠望し、海岸べりの温泉に宿泊して、日本海に沈む夕日を眺めるプランを考えていた。米山は、薬師如来を祀つた現世利益のある山であり、この山ならどなたも登つたことがないだろうし、多分全員ご利益で登れるから大丈夫だと考えた。

ところがその後佐薙大先輩が「妙高山」を指名とのこと。いやこれは大変だ、登山スタート地点から一四〇〇メートル近い高度差は、健脚でも往復のコースタイム九時間の長丁場、失礼ながら平均年齢は七十歳を超える諸先輩が集団で登れるものか不安になつた。スカイケーブルを利用する新赤倉温泉からの少し易しいルートは、始発便が午前七時半でこれではとても明るい時間に帰つてこれない。結局明治時代より百年の歴史ある燕温泉から北地獄谷を登るクラシックルートしか選択肢はなかつた。

北陸新幹線で行く妙高登山

昨年の針葉樹会報一三一号（一〇一四年十一月）に、「上越後の山・海・風土」の拙文を

寄せたが、その中で、間もなく開通する北陸新幹線の話題に触れた。

既に北陸新幹線は三月に開業して以来、連日北陸方面は大盛況だが、案の定速達型の「かがやき号」が素通りする上越妙高駅は今一つ

盛り上がりを欠き、それでもテレビに放映される機会は増えた。

また時を同じくして「妙高戸隠連山」が新しい国立公園に指定され、地元は観光復興に望みを賭けている。（実際は上信越国立公園が広すぎるので、妙高戸隠を分離したもの）

少し俗っぽいが、今回の越後シリーズは、「北陸新幹線上越妙高駅を利用した前泊日帰り妙高登山」をキヤツチコピーとして、素案を作り、在京幹事の宮武さんに送つて、参加者の募集をお願いした。

計画作成にあたり、七月下旬、鉄道やバスの接続状況、予約した宿と登山路の下見に出かけた。下見ルートは、出発地から北地獄谷ルートを登り、妙高山頂上への尾根にある標高一九三五メートルの天狗堂に至るまでである。まだ沢筋には雪も残つていて涼しい箇所もあつたが、樹林の中の猛暑でバテ、これは本当に登頂は容易ではないと悟つた。

あとはメンバーの足並みと天候次第だが、九月は残暑厳しい頃であり、苦しい登山になることが想定された。参加メンバーは、佐薙さんを最長老に、小野さん、小島さん、岡田さん、吉沢さん、中村さん、宮武さん、そして若手では福島より斎藤君が駆けつけてくれて心強かつた。



妙高山（岡田撮影）

燕温泉でのひと時

九月五日新幹線組を上越妙高駅で迎えて在来線に乗り換え、関山駅下車。午前中二本しかない燕温泉行に六名が乗り、残り三名が車での現地集合となつた。

燕温泉は、標高一一〇〇メートルにある日本の大湯百選にも選ばれた名湯で、少し麓の関温泉、赤倉温泉と並んで、古くからの爱好者が多く、週末には近隣から温泉好きが無料の露天風呂に入りに来る。

今年の初秋は、予想に反して雨模様の日が続き、残暑がなかつた。この週末も長雨が続く中、わずかな晴れ間が期待されたが、霧に覆われていた為、妙高山の絶景ポイント周遊散歩は諦めた。当初妙高から雨飾への縦走を企画されていた中村さんも、早々と延長線を断念されていた。

宿に全員到着後、名物の日本そばをゆつくりといただく。佐薙さんと宿の女将が同世代で、戦時の疎開話に花が咲いた。そして昼食後、登山口を散歩がてら下見し、日本の滝一〇〇選の惣滝を遠望、近くの「黄金の湯」なる露天風呂に寄つた。

露天風呂には、信州更埴市から日帰りで温泉に入りにきていた先客がいた。「妙高登山は大変だね。やはり靴は5万円以上のしつかりしたものでないともたないね」などとひとく

さり。我々は適当に話を聞き流して露天風呂を楽しんだが、これが後々真実となる。

宿に戻つて、佐薙先輩より、「ところで妙高山は何火山なの?」と尋ねられ、「休火山ですね。頸城三山の内、火打山は火山ではなく、焼山は活火山で一部入山禁止ですが」と答えて、そうだ佐薙さんは富士山検定をトップで合格したこと気に付き、事前の勉強不足を悔いた。

そこから、佐薙さんより、日本の火山のうんちくを賜り、現在は概ね一萬年以内に噴火した火山や現在活発に噴気している火山を全部活火山と呼ぶこと、そしてそれらは最新で一一〇山あることを教わる。妙高山も活火山であることを改めて知り、不学を恥じた。

この日の夕食は、地元の食材を中心とした料理を賑やかに楽しみ、夜は明日に備えて皆そこそこに就寝した。

妙高山登頂

九月六日 燕温泉岩戸屋発四時五五分—源泉作業小屋五時四五分—麻平分岐六時三五分—天狗堂八時—妙高南峰十時二〇分

当日は朝方うす曇りであったが、昨日より視界が良かつたのが幸いで、宿で用意してくれた握り飯を入れて、五時前少し暗い中を出発し、一ピッチ目の源泉作業小屋で水

を補給し、そこから小野さんトップで進む。

いつも針葉樹会報を読んでいて、北は北海道から全国を登っている一部の諸先輩の元気さには少々驚いていたが、小野さんの歩き方を拝見して、少し合点がいった。兎に角無理をしないのである。最近は自分の場合単独行が多く、気ばかり急いでバテることが多い気がする。

麻平との分岐を過ぎ、北地獄谷の「胸突き八丁」を難なく登りきれば、八時には下見に来た天狗堂に到着した。この時点では、これは行ける、あとは天候が半日持つてくれれば何とかなると確信した。

天狗堂から上部はほぼ尾根伝いを一気に高度を上げていき、光善寺池、風穴を過ぎれば、目の前に大きな岩壁が現れる。振り返れば、高曇りの中、遠くに野尻湖と斑尾山を望み、眼下に広がる、赤倉・池の平の温泉郷。

赤い屋根がシンボルの赤倉観光ホテルに行くと、佐薙さんが昔新婚旅行で二晩泊まり、岡田さんが十数年後に続いた話題で盛り上がる。ナナカマドが薄らと紅葉はじめ、白樺とのコントラストが美しい。

大岩壁の長い鎖場は登りと降りの人が一人ずつしか通れないため、毎年登山シーズンには交通渋滞を起こすほどだ。この日も我々の前を信州から来た英國の若者三名が日本語を

学生の活動

しゃべりまくつて我々とすれ違つた。外国人が山登りにも大勢来ているというのが昨今の印象である。

鎖場を越え、大きな溶岩が乱立する中をひと登りすると、ほどなく最高点の妙高南峰に十時二十分到着。一人の脱落もなくにこやかに登頂できたことは、本当に僥倖であった。

秋雨の下山路

妙高南峰発一〇時一〇分—黒沢池分岐一二

時三〇分—長助池一二時五〇分—大倉沢徒渉

一五時—燕温泉一六時五分

頂上からの帰りはまだ時間に余裕があつたことと、あの鎖場をまた通る気がしなかつたので、当初の計画通り内輪山を横切る燕新道を降ることとした。北北西に進路をとり、一等三角点のある北峰を過ぎて、長い急な下りが続く。

小雨になり濡れ始め、灌木帯の枝をかき分け全身びっしょりになり始める。頂上を出発して一時間後の十二時五十分、漸く長助池に出る。内輪山の底にあるぼつかりとした湿原には、オヤマリンドウ、ヤマトリカブト、ハクサンコザクラが咲き、晴れていれば天国のようなところであろうか。岡田さんは疲れを知らないかのように花の撮影に熱心だった。しかしここからの降りは本当に厳しかつ

た。秋の長雨で道がいたるところでぬかるんで、歩き辛いことこの上ない。途中から不幸にも片方の靴底が割れてしまった吉沢さんにも、どなたかが昨日の露天風呂の5万円の靴の話を蒸し返す。針金と修理具を持っていた斎藤君がサポートしてくれ急場をしのいだ。

また次第に全員の疲労が増していく中、小島さんの明るい掛け声に救われ、慎重に下りを続けた。大倉沢の徒渉点では、まだそれほど増水ではなくホツとした。

そこからのブナの林をアップダウン繰り返すと、見慣れぬ工事中の橋が出現した。道を間違えたのかと思ったが、とにかくしつかりした林道が続いており、そこを歩き切ると、ひよいと燕温泉の上に出た。少し偵察不足であつたが、道なりに来たところが燕新道の終了点であつた。時に五時少し前。登り五時間半で、下りは六時間半。さすがに皆さん疲れきつたが、無事終了となつた。昨日の宿の女将が迎えてくれ、濡れモノを抱えた我々を快く温泉に入ってくれた。

『懇親』ならぬ『渾身山行妙高山』はこうして終わり、延泊することになつた吉沢さんを残し、皆それぞれの手段で帰路に就いた。わが故郷の山に来ていただいた皆さんに地元幹事として御礼申し上げます。

「F.N.短大」の記録

(2015年6月～9月)

中村 雅明 (昭43年卒)

6月21日 (日)

丹沢・水無川新茅ノ沢・塔ノ岳 (中止)

参加予定者：中村(雅)、藤原、宮武、(学生)太田、西山、上、山崎、工藤。6月21日が悪天の為、7月4日 or 5日に延期するも両日とも雨の為中止。

8月9日 (日)

奥多摩・水根沢谷

奥多摩・水根沢谷遍行

参加者：中村(雅)、藤原、(学生)太田

水根キャンプ場先から入谷、半円の滝上で遡行終了し、水根沢林道を水根バス停に下る。ほぼ水線どうしに登つた。真夏には涼味満点だつた。

9月4日（金）

裏妙義・谷急沢右股

横川駅→国民宿舎→丁須の頭→鍵沢→横川駅

参加者…藤原、（学生）太田

国民宿舎先の入溪点が見つからず、国民宿舎からの一般道で登る。妙義らしいワイルドな岩だらけの登山道であった。おまけに二人とも山蛭にやられて、この地域が11月が登山適期であると思い知った。

9月5日（土）

谷川・白毛門沢

土合橋→白毛門沢（タラタラのセンまで）→

登山道→土合橋

参加者…藤原、（学生）太田

白毛門沢はさすが上越の沢で川幅が広くナメが綺麗であった。ところがタラタラのセンの巻き道でルンゼに迷い込み灌木帯に難渋の上、登山道に逃げ込んだ。白毛門沢上部の大ナメを見逃したので秋に再訪予定。

北岳夏合宿（二泊三日班）

内海 拓人（法学部2年）

メンバー＝上茂衡（法3）、内海拓人（法2）、

安藤由都（法1）、工藤京平（経1）、小久保剣（法1）、原島大介（商1）

行程、コースタイム

（1日目、2日目北岳山頂までは一泊二日班の記録参照）

2日目 9:00 北岳山頂→10:30 北岳山荘→

10:50 中白根山→11:35-12:30 間ノ岳→

13:05-13:20 中白根山→13:50 北岳山荘着、

幕営→16:00 夕食→19:30 就寝

3日目 3:00 起床→3:30 朝食→4:30 撤収→

5:25 北岳山荘発→6:30 北岳→7:15 北岳肩ノ小屋→8:50 白根御池小屋→10:15 広河原

●8月18日

出発の前日、降雨量が規定値を越えたため甲府駅から広河原へ向かうバスが運行中止になつてゐるという情報が入ってきた。集合時間も1時間遅らせて様子を見ることになつた

が、正直僕の中でのモチベーションは相当中がつていた。甲府駅に行つてもバスが動いている保証はなく、天気予報によると北岳山頂に向かう2日目以降は雨だった。あまり乗り気ではないが電車に乗り込み、高尾駅の鈍行列車で部員と合流した。高尾から甲府までは2時間近くかかるが、話しているとそこまで長くは感じられない。

甲府駅に降り立つと予想に反して晴れていった。幸いにもバスは通常通り運行していた。駅前のバス停から登山者とザックで一杯のバスに乗り込み、広河原へ向かつた。車内では元気のいい車掌のおばさんが勢いよく話していた。出発して間もなく寝てしまつたが、途中車の揺れに起きた。気付くと山奥へと入つてきており、道はバスが通るとは思えないほどの道幅、急カーブの連続であった。

甲府駅出発から2時間、ようやく広河原に到着した。各自準備、装備分担の確認をしていると太田さんが慌ててインフォメーションセンターでフリーズドライの雑炊を買つてきた。2日目夕食のレトルトカレーを家に置いてしまつたようだつた。忘れたのが米の方でなくてよかつた。

広河原を出発し、吊り橋を渡ると早速急登が始まつた。僕は列の後ろから2番目にいたが、ついていくとすると少し息が上がりそ

うになつた。真ん中の1年生も苦しそうだつたので明らかにペースが早すぎたようだつた。毎回のことだが、歩きはじめのペースを掴むのは難しい。

急登が一段落してしばらくするともう御池小屋が見えてきた。思つたより早い到着であつた。小屋に到着すると、ヘリが着陸するということですぐには幕営できず、しばらく休憩した。みんなでヘリの着陸の様子を見た後、幕営をして夕食の準備をした。1日目の夕食はペミカンを用いたシチュードパン、アルファ米であった。シチューは、ペミカンの脂っこさが疲れた体に嬉しい、感動的な美味しさであった。ペミカンを使えると料理の幅が広がると感じた。日が沈むと冷えが強まつてきて、フリースを着て丁度よかつた。小屋の掲示を見ると、2日目の天気予報が上向きになり、雨が降ることはなさそうであった。

翌日稜線上から景色が見えることに期待を寄せて就寝した。

起きると、雨は降つていなかつた。まだ暗かつたので晴れることを期待しながら朝食の準備を始めた。朝食はインスタントラーメンであった。調理に失敗するはずもなく、肌寒い中で温かいラーメンは嬉しかつた。撤収を

始めていると、次第に明るくなつてきた。良く晴れており、北岳山頂が朝日に照らされて赤く見えた。

撤収を終え、北岳山頂へ向けて出発した。

草スベリは相当な急登であると噂は聞いていたが、実際登り始めるとやはり辛かつた。後から見ればコースタイムを大きく上回るペースであつたので、もっと遅いペースで登るべきであつた。高度を上げるにつれて、眺望が開けていった。小太郎尾根分岐まで到達すると、稜線上に出た。視界を遮るものはなく、今までに見たことのないスケールの景色であつた。風が少し強くなり、防寒着を一枚着て稜線歩きを始めた。雲の上に出た山脈を眺めながら歩いていると、本当に来てよかつたと感じた。北岳山頂までは思つていたよりも険しい登りがあつたが、景色を見ていると疲れも忘れられた。

北岳山頂には予定より1時間程早く到着した。文字通り360度のパノラマビューで、雲海上には富士山も見えた。南西方向には間ノ岳へと続く稜線が見えた。記念撮影などを楽しんだ後、一泊二日組と別れて北岳山荘方面を目指して出発した。

山頂出発から僕が先頭を歩いたが、なぜか出発直後から道でない所に入つてしまつた。元のコースに戻るまで10分程無駄にし、その

後は急な岩場を下つていつた。下に見える谷はとても深く、地図上にも危険マークがついている箇所であつたため緊張感をもつて進んだ。険しい岩場を越えると北岳山荘が見え、再び気持ちの良い稜線歩きであつた。北岳山荘で休憩し、今後の行程を話し合つた。3日の天気予報が良くなかったため、行動時間が9時間を超え、沢の渡渉をしなければならない農鳥岳・奈良田への縦走は取りやめることなつた。天気の良い2日目中に肩の小屋まで戻つてしまふことが望ましかつたが、間ノ岳往復をするためには時間が足りなかつた。そこで、北岳山荘に荷物を置き、時間が許す限り間ノ岳にアタックすることとなつた。間ノ岳まで辿り着くためにはコースタイムの1.5倍ほどのペースで歩く必要があつた。途中の中白根山あたりまでは良いペースを保つていたが、間ノ岳頂上が見えたところで時間切れとなつた。だが、山頂を見てしまふとどうしても行きたくなつた。また、帰りもこのペースを保つのは難しいと思われた。そこで、2日目は北岳山荘に幕営することにして、そこからはゆっくりと間ノ岳を目指した。時間に余裕が生まれたので、間ノ岳登頂の後はペースを上げる必要もなく、景色を楽しむことができた。北岳山荘に到着すると幕営をし、夕食まではコーヒーを飲むなどして

のんびりと過ごした。これが登山、特にテン泊の醍醐味であると感じた。2日目の夕食はアルファ米、フリーズドライ食品であった。夕食後は寝たい人は早めに就寝し、僕は1年生とトランプをして遊んだ。明日天気が崩れるとなると、こんなに楽しい登山は今までかもしれないという不安を抱いて就寝した。

● 8月20日 雨

目が覚めると、フライシートに雨が打ちつける音が聞こえた。朝はまだ降っていないだろうと思っていたので、気分が沈んだ。朝食はもう一つのテント内で作ることにした。水を汲みに行くと、ヘッドライトの光が霧に反射して視界が悪かった。雨でさえ嫌なのに、北岳山頂下の岩場を霧の中進むのはとても不安に感じた。インスタントラーメンを食べ終えると周囲が明るくなってきた。だが雨は止まなかつた。今日はペースを上げることもできなさそうなので、なるべく早く出発する必要があつた。気分が全く乗らないが、雨の中撤収を行つた。濡れて重くなつたフライシートをゴミ袋でくるんでザックに押し込んだ。パッキングが終わると北岳を目指して出發した。幸いなことに霧は晴れて視界は悪くなかつた。だが、濡れて滑りやすくなつた岩の上を歩くのは気分が良いものではなかつた。

足にはこれまで2日分の疲労が感じられた。昨日まで絶景だったとは思えないほど周囲は雲で真っ白だつた。北岳山頂直前で一瞬霧が晴れて、間ノ岳方面の稜線が見えた。綺麗な景色を見ると不思議と元気が出た。

北岳山頂を越えると再び雨が強まつた。岩場が不安であったが、実際に下つてみると登つていたときに感じたほど急ではなかつた。むしろ長時間続く草スベリの急斜面を下る方が辛かつた。御池小屋が見えるとようやくここまで戻つてきたと少し安心した。

御池小屋で休憩後、広河原に向けて再び出発した。疲労の蓄積からか、登りよりもずいぶんと長い道のりに感じた。広河原の小屋が見えると思わず笑みがこぼれた。奈良田に下りていれば温泉に入れたのだが、残念ながら広河原には何も無い。代わりに甲府駅でほうとうを食べることにして、東屋の下で雨をしのいでバスを待つた。

● 総括

天候悪化の懸念から、結局当初予定していた白峰三山縦走は叶わなかつた。実際に3日目は天気が崩れたので、最後に沢の渡渉がある縦走を取りやめた判断 자체は正しかつたと思う。だが、仮に天気が安定していたとしても、3日目の疲労感を考えると9時間ほどか

けて奈良田まで歩くのは厳しかつたように思われる。やはり白峰三山を縦走するためには甲府に前泊し、初日の早朝に広河原に入る必要があると感じた。

今回の合宿は2泊3日で、僕にとっては最長の山行となつた。最終日の疲労感は今までに感じしたことのない独特のものであつた。ただ前回の雲取山合宿と比べると、荷物の重量によつて体力を削られる感覚は軽減された。今後より長い距離の縦走を行つていくためにには、重い荷物を持った状態での歩行にもつと慣れていく必要があると感じた。

今回の合宿では、高低差の大きさや天候の不安定さなど、3000m級の山であるからこそ考慮しなければいけないことがたくさんあつた。だが、その分見える景色は今までに見たことのない程スケールの大きいものであつた。今後もぜひ南アルプス周辺、そして今シーズンは行けなかつた北アルプスの山々に挑戦していきたいと思う。

北岳夏合宿（一泊二日班）

大矢 和樹（法学部2年）

メンバー＝太田貴之（商4）、大矢和樹（法2）、

坂本遼（法1）、コースとタイム（一泊二日班）

1日目 12:00 広河原着 12:20 広河原発
12:45 大権沢コースとの分岐点到着→14:35

白根御池小屋到着

2日目 5:10 白根御池小屋発→（草すべり

コース） 6:25 右股コースへの分岐点→6:45
小太郎尾根分岐点→7:35 北岳肩の小屋着→
8:25 北岳山頂着 9:05 北岳山頂発→9:35 北
岳肩の小屋着→10:00 小太郎尾根分岐点→
11:40 大権沢一段

●感想及び反省等

今回は、個人的には初めてのアルプスであつたので、計画段階から非常に楽しみであつたのだが、私的事情により部分参加となってしまった。まず、反省点としては、準備段階で、振り分け等の指示が遅れてしまい、

他の部員を煩わせてしまったことである。次回、計画する際には、もっと早めに行う」とが肝要であると感じた。

今回は登山口である広河原自体が相当、甲府駅から遠く、甲府駅の集合時間をかなり早めに設定していただけ、部室に前泊することにした。しかしながら、困ったことに、前日の時点では北岳一帯は大雨であり、林道が雨量規制値超えの影響で、バスが運休していた。そのため、太田さんとともにバス会社や交通局に電話をし、確認したところ、次の日は9時まで運行できるかわからないということでした。そのため、集合時間を当初の8:30から9:30に変更することにした。

●8月18日（火）

朝起きて、中央線を西へ西へと進んだわけだが、天気はかなりよさそうであった。甲府駅につき、広河原行きのバスが運行されていてことを確認すると、安心できた。甲府は広く認知されているように暑かつたためか、広河原に到着してみると、空気は幾分ひんやりと感じられた。目の前を流れる、早川は澄み渡つており、まさに清流であった。広河原のバス停からつり橋を渡り、広河原山荘の横から登山を開始した。登り始めは特に急でもなかつたのだが、大権沢との分岐点を境に、一気に急になり始めた。しかしながら、自分が

先頭になると、なぜか急登になるとコースタイムより圧倒的に速いペースで歩く癖が出てしまい、他の部員からペースが速いと指摘をうけるということになってしまったのである。休憩は比較的こまめに入れた。それでも、テント泊の荷物量はなかなか多く、みな大変そうであった。そんななかでも、目の前にそびえたつ鳳凰三山の雄姿は、心に余裕を持たせるものであった。

白根御池小屋には、コースタイムのおよそ六割の時間で到着してしまった。さっそく、テントを張りたいと思っていたのだが、小屋の方からヘリの着陸を知らされ、テントは15時半ころ張り始めた。

夕飯は小屋前の机があいていたので、そこで料理等を行つた。太田さんが作成してきたペミカンとシチューの素で、シチューを作り、パンおよびご飯で夕食とした。目の前には薬師岳が夕日に照らされ、悠然とした姿を堪能できた。夜は、次の日は3時起きであったので、早めに就寝した。

●8月19日（水）

二日目は予定通り3時に起床した。空を見上げるとイマイチ星が見えないので、曇りであろうと判断した。二日目の朝ごはんはラーメンを食した。山の朝は8月といえどもかなりひんやりしており、温かいラーメンの汁は

絶品であった。

空が白み、徐々に朝焼けが出始めた。朝焼けに照らされ、頭上の北岳は橙色に燃え上がり、池の水面には朝焼けと薬師岳が映し出さ、自然の神秘を感じた。

午前5時過ぎ、一通りの準備が終わり、北岳の山頂に向けて出発した。まずは草すべりコースを抜けるのにおよそ2・5時間かかるとされていたので、かなり大変であろうなと予想していた。当初、歩き始めは寒く、セーターまで着こんでいたのだがものの10分歩くと暑くて仕方がないような状態になり、結局半そでで歩くことにした。草すべりはなかなか急登であり、半袖でも少し汗がにじんだ。例によつて、自分が先頭を歩いていたのでスピードがでていたらしく何度も指摘されるもののなかなかおらず、かなりのペースであつたようだ。しばらくすると振り返ると鳳凰三山の山頂と似たような高さにいることが分かり、雲海が見えた。さらに目を移すと、大樺沢の雪渓が垣間見えた。

白根御池小屋を出て、わずか90分で、小太郎尾根分岐地点に到達した。気がつけば、北岳の山頂は目の前に近づいて見えた。それだけではない。鳳凰三山のやや左には八ヶ岳が見え、近くの甲斐駒ヶ岳、仙丈ヶ岳もはつきり確認でき、さらにこの日の朝は空気が非常に

に澄んでいたので、遠くにあるはずの槍ヶ岳を初めとする、北アルプスの山々が見えた。さらに中央アルプスの山々もはつきり見え、非常に感動した。

尾根に出ると、とたんに気温が下がり、さらに風が強めに吹いていたので、体感温度はかなり低くなつた。道も途中まではかなり歩きやすかつたものの、途中からは岩場であったのであるきにくい箇所もあつた。岩場を歩く際には、緑色のマーキングを探しながらとくいう感じであったが、なかなか見つけにくく、霧や豪雨時など視界が悪い時にはなかなか危ないなと感じた。そうこうしていると、北岳肩の小屋に到着した。標高3000メートルの標識をみると、なかなか感慨深かつた。北岳は肩の小屋からはさほどかからなかつた。最後岩場を登つていき、頂上だ！と思つたら、その先に頂上が見えたときは、ややガクツときたが、その頂にたつたときの気分はなかなか最高だつた。

最後は主に自分の足に巨大なマメができるしまつたことが原因であるが、スピードが落ちてしまつた。やはり、75リットルザックパンパンにつめて、一日に800メートル登つて1600メートル下るのは、想像以上に体力がいるのだなという印象である。しかし、天気に恵まれたといえる。一日早ければ現地入りは、バスの運休で困難であつただろうし、一日遅ければ雨天であつた。北岳から見えた、仙丈ヶ岳や甲斐駒ヶ岳等には登つてみたいなあと感じ、帰りのバスにゆられた。

遠くには雲海のかなたに富士山が見えた。360度のパノラマはここまで登つてきたきつさを全て忘れさせるようなものであつた。また、北岳はかなり有名なやまだから、山頂はかなり混雑しているのだろうと思つていたのだが、想像以上に空いて驚いた。保護員のような方がいたので、聞いてみると、次

に賑わうのはシルバーウィークのころだとう。「ま、そのころにはもう氷張つているよ」と陽気に話してくれた。

帰りは元来た道を引き返すだけであつた

針葉樹総会報告

平成27年度 針葉樹会総会

2015年7月13日 如水会館14階記念室

【出席者】佐薙、松尾(寛)(S31)、上原(S33)、永井、仲田(S36)、遠藤(S37)、

高橋(S38)、竹中(S39)、小島、佐藤

(力)(S40)、池知、高崎(俊)、原、佐藤

(久)(S41)、吉沢(S42)、中村(S43)、

宮武(S45)、井草(S48)、前神(S51)、

兵藤(S52)、小宮山(H26)

(学生)高橋部長以下18名

*会員総数148名(内、特別会員3名)、正

会員数145名。出席会員21名、委任状提

出会員57名。出席会員合計78名。「会員の
1/3以上の出席(49名)を要する」総会
成立条件を満たしている。

一 平成26年度活動報告

1 総会、幹事会

①幹事会 2014年6月4日(金)
②総会 2014年7月14日(金)

2 学生(一橋山岳部)活動の支援

①登山訓練参加費用等の補助
②部員急増により各OBAからの学生への装
備寄贈、寄付を今後も継続。

③会員・学生の合同登山。

3 創部90周年記念事業(夜叉神峰周辺の登山

道整備)

①2014年11月15~16日檜尾峰から芦

安(山の神)への登山道整備、トンネル

東口から檜尾峰に至る登山道の崩壊部補

修(会員9名、学生1名、参加)

4 猿親山行

①2014年6月7~8日 八ヶ岳トレーラル
②2014年7月26~27日 越後シリーズ(粟ヶ岳、弥彦山)

③2014年12月7日 富士山ビュー登

④2015年2月28日~3月1日 雲取山

⑤毎月、第三月曜日 三月会

5 学生との主な合同山行

①2014年6月9日 大岳(会員3名、
学生4名)

②2014年8月24~25日 富士登山
(会員4名、学生9名、一般9名)

③2014年9月12~15日 穂高・涸沢
(会員1名、学生2名)

④2014年10月18日 回り日平合宿
(会員4名、学生4名)

⑤2015年2月7日 日光 雲竜渓谷

(会員2名、学生3名)

⑥2015年3月22~23日 八ヶ岳 黒

百合平 雪上訓練(会員1名、学生6名)

⑦2015年5月23~24日 谷川岳雪渓
歩行訓練、白毛門登山(会員3名、学生
3名)

6 会合

①2014年7月14日 針葉樹会総会(会

員28名、学生13名)

②2014年11月1日 月見の宴、「とり

天」(会員6名、学生8名)

③2015年1月21日 新年会 岡田さ

ん講演「ヒマラヤ・トレッキング」(会員
17名、学生5名)

④2015年1月24日 山岳部室 外壁

塗装・補修(会員7名、学生5名)

7 出版物

針葉樹会報の発行

130号 2014年7月発行
131号 2014年10月発行
132号 2015年3月発行

8 図書

①「針葉樹文庫」(芦安山岳館)のメンテナ
ンス(戦前の会報の納品)。針葉樹文庫関
係の製本完了

②部誌の製本、補修・2巻（1965年度、
1966年度）の製本と2巻の背表紙付

け替え。

③山岳部室蔵書の管理 蔵書整理は次年度
に持越し・老朽書棚は山岳部が新品入れ

替え（一橋祭の収益金で）。

9ホームページ

活動の活発化を反映して山岳部員の投稿が

大幅に増加

動画の掲載開始

10会員の異動

町田広樹 H27卒

ベイカレントコンサルティング

長島弘賢 H27卒 竹中工務店

伊藤久裕 H27卒 学究社（ENA）

吉川悠太 H27卒 ツムラ

▼会員のご逝去

小林茂雄（S19） 2014年8月14日

高崎治郎（S31） 2015年3月6日

三 平成27年度活動計画

▼会長挨拶の中で提議された課題

*今回、現役の学生部員が18名参加し心強

い。今後どのように育てて行くかが課題

になる。

*関東地域の山々をフィールドに藤原、中

村（雅）会員の献身的な指導を受け、基

礎的な山歩きの技術習得に努めている。

両氏の献身的な努力に感謝する。

*中村（保）会員が国際的に定評ある

Japanese Alpine News 16号を発刊され、ま

た「ヒマラヤの東」関連の地図集が近日

中に日本山岳会110周年記念事業とし

て刊行される。

*会費免除規定に関して、現行規定は定額

会費（5千円）と賛助会費との2本立て

改訂した際に免除規定は削除されている

が、山岳部の活動を財政的、人的に如何

に支援するか、改めて論議したい。

*毎月の三月会も、首都圏におられる多く

の会員の参加が望まれる

*役員・幹事の若返りを図りたい。

二 平成26年度決算報告及び遭難対策基金

収支報告（36ページ資料）

1学生（一橋山岳部）活動の支援

①山岳部室の緊急修理（入り口屋根の雨漏り）

②登山訓練参加費用の補助

③合同山行、廻り日平合宿の費用補助（合

同登山後の反省会参加費用の一部、藤原

山荘使用料の一部を針葉樹会として一人

一回1000円程度補助する）。

④部員急増により各OBからの学生への装備寄贈、寄付を今後も継続。

⑤会員・学生の合同登山

2創部90周年記念事業の継続（夜叉神峰周辺の登山道整備 予算15万円）

①既整備道（高谷山→檜尾峰→芦安トンネル東口、および檜尾峰→芦安山の神）の

補修

②本事業の当初目標である、高谷山から力

ンバ平への山道の修復に着手。

3懇親山行

①2015年5月31日～6月八ヶ岳ト

レール（アダージオ合宿）

②秋の山行（9月頃） 越後シリーズ 妙

高山

③冬の山行（12月） 富士山の展望を楽し

む（清八山）

④春の山行（4月頃） （未定）

4会合

①持ち回り幹事会 6月9日（火）

②新緑の宴 6月13日（土）

③総会 7月13日（月）

④月見の宴 11月（一橋祭）

⑤新年会 1月

針葉樹会平成26年度 一般会計決算(案)
(平成26年6月1日～平成27年5月31日)

2015.7.13

(単位 円)

項目	支出		収入		予算
	実績	予算	項目	実績	
会報発行費	300,024	400,000	前年度繰越	2,160,296	2,160,296
山岳部補助	200,000	200,000	納入会費	881,000	500,000
通信連絡費	31,079	30,000	(普通会費)	(515,000)	(400,000)
慶弔費	24,364	30,000	(賛助会費)	(376,000)	(100,000)
学生保険補助	68,756	54,000	会余利金	12,680	30,000
日本山岳会費	12,432	12,500	預金利子・利息	290	200
Home Page年間維持経費	70,432	70,500	会報販売代金	0	0
図書関係費用	0	20,000	寄付金	0	0
芦安登山道整備	74,672	150,000			
富士山登山補助	152,116	150,000			
部室修繕費	326,025	250,000	(収入小計)	903,970	530,200
学生登山研修補助	0	100,000			
(支出小計)	1,259,900	1,467,000			
次期継り越し金	1,804,366	1,223,496			
合計	3,064,266	2,690,496	合計	3,064,266	2,690,496

三菱東京UFJ 2,160,296円

今年度会費支払者72人、内翌年度以降分前払者26人
昭34年卒市川陽一様(30万円)ほか19名

針葉樹会報 130号、131号、132号分

外壁塗装費 241,569円、補修費 84,456円

三菱東京UFJ 1,792,086円+現金12,270円

針葉樹会平成26年度遭難対策基金決算(案)
(平成26年6月1日～27年5月31日)

項目	支出		収入		予算
	実績	予算	項目	実績	
支出	0	0	前年度繰越	3,243,367	3,243,367
			うち遭難対策基金	2,343,367	2,343,367
			うち遠征基金	900,000	900,000
			利息他	648	600
(年度内実支出 小計)	0	0	(年度内実収入 小計)	648	600
次年度繰越	3,244,015	3,243,967			
うち遭難対策基金	2,344,015	2,343,967			
うち遠征基金	900,000	900,000			
合計	3,244,015	3,243,967	合計	3,244,015	3,243,967

三菱東京UFJ定期預金 3,244,015円

針葉樹会平成27年度 一般会計予算
(平成27年6月1日～平成28年5月31日)

2015.7.13
(単位 円)

項目	支出		収入		予算
	金額	前期実績	項目	金額	
会報発行費	400,000	300,024	前年度繰越	1,804,366	2,160,296
山岳部補助	100,000	200,000	納入会費	500,000	881,000
通信連絡費	40,000	31,079	(普通会費)	(400,000)	(515,000)
慶弔費	30,000	24,364	(賛助会費)	(100,000)	(376,000)
学生保険補助	80,000	68,756	会余利金	10,000	12,680
日本山岳会会費	12,500	12,432	預金利子・利息	200	290
Home Page年間維持経費	70,500	70,432	会報販売代金	0	0
図書関係費用	30,000	0	寄付金	0	0
芦安登山道整備	150,000	74,672			
富士山登山補助	0	152,116			
学生登山研修補助	100,000	0			
部室修繕費	0	326,025			
合同登山補助	100,000	0	(収入小計)	510,200	903,970
(支出小計)	1,113,000	1,259,900			
次年度への繰越	1,201,566	1,804,366			
合計	2,314,566	3,064,266	合計	2,314,566	3,064,266

会報は年3回発行を予定

学生部員の増加に伴い装備等の購入が必要

慶弔費は過去の実績を勘案し計上

日本山岳会会費27年度分

部室にある部誌の製本を予定

芦安登山道整備第4次計画

学生部員の国立登山研修所等の研修への

参加費用を一人2万円限度で補助する。

学生一人当たり食費1,000円、宿泊費1,000円を補助

針葉樹会平成27年度遭難対策基金予算
(平成27年6月1日～平成28年5月31日)

0.018%を想定

項目	支出		収入		予算
	金額	前期実績	項目	金額	
会報発行費	400,000	300,024	前年度繰越	3,244,015	3,243,367
山岳部補助	100,000	200,000	うち遭難対策基金	2,344,015	2,343,367
通信連絡費	40,000	31,079	うち遠征基金	900,000	900,000
慶弔費	30,000	24,364	利息他	600	648
学生保険補助	80,000	68,756			
日本山岳会会費	12,500	12,432			
Home Page年間維持経費	70,500	70,432			
図書関係費用	30,000	0			
芦安登山道整備	150,000	74,672			
富士山登山補助	0	152,116			
学生登山研修補助	100,000	0			
部室修繕費	0	326,025			
合同登山補助	100,000	0	(収入小計)	510,200	903,970
(支出小計)	1,113,000	1,259,900			
次年度への繰越	1,201,566	1,804,366			
合計	2,314,566	3,064,266	合計	2,314,566	3,064,266

⑥三月会 每月、第三月曜日

5 出版物

針葉樹会報の発行

133号

134号

135号

2015年

2016年

2015年

2016年

11月

3月

7月

7月

四 平成27年度 役員改選

会長

S 39

竹中
彰

(留任)

副会長

S 40

小島
和人

(留任)

相談役

S 30

石原
脩

(留任)

幹事

S 31

上原
佐薙

(留任)

総務幹事

S 41

会計幹事

S 41

保険幹事

S 40

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

S 53

S 62

S 48

S 40

S 41

百姓、庭いじり、ビジネス、いろいろなお付き合い、等々。山は遠くから眺めております。

昭33年 小林博 元気で独身生活をエンジョイしています。

昭33年 加地幸雄 部員の数が増えてよかつたですね。お目出度うございます。短大の献身的な先生のお蔭です。ご苦労様でした。

昭34年 沢木一夫 同期の市川君にときどき京都北山を案内してもらっています。

昭34年 市川陽一 激しい山登りは無理ですが、眼前の比叡山には頻繁に入って居ります。正に遅速で山の雰囲気を楽しんでいます。

昭34年 Trail Run、距離50km累積標高3700m、制限時間11時間というトレイル・ランが開催されました。トレイル・ランのプロの鏑木毅氏発案のコースで、所謂、回峰行者が辿るコースも含まれ大変厳しいコースです。

私は細切れに何回となく辿ったコースですが、これを一日で踏破するとは想像外でした。愚息が参戦しましたので私は観戦に出向きました。1000名近くの参戦者の内完走者は約46%と言う酷いものでした。靈峰比叡山と言う事で全国から参加されたようです。尚この近辺では「東山36峰

比叡トレイル・ラン」と言うのが毎年12月の第一日曜日に開催され（これは10年以上前より行われています）スタートは当家の側の「宝ヶ池」公園、ゴールは伏見稻荷大社の距離32キロで毎年1000名以上のランナーが参戦です。普通のコースですので完走者が全てと思われます。

昭34年 景山豪治 辛うじて健康を維持しています。友人と共有の丹沢のロツジで過ごす日が多くなっています。

昭36年 有賀盈 ここ松本での夏も今年で6回目になりますが、相変わらず元気に過ごしています。

昭36年 小林正直 5月下旬に墓参りに行き、新幹線の車窓から越後駒ヶ岳、八海山を眺めました。

昭37年 三井博 折角の総会ですが、私は体調不良が続いていまして、参加できませんので、ご了承ください。昨年の脳梗塞発症に続きまして、最近早期の大腸がんが発見されまして、今月末にNTT関東病院に入院し、直腸にある大きな平らなポリープを除去します。大事には至らない予定ですが、皆様方の盛大な盛り上がりを祈念して、今年は欠席いたします。

昭37年 宮本英治 5月に興因寺山、白雪山へ仲間と行きました。

昭37年 遠藤晶士 皆様の元気なお話を伺うことを楽しみにしております。

昭38年 多田伸治 相変わらずぼちぼち何とかやつてます。

昭39年 蝶川隆夫 7月に同期の村上さんと一緒にイタリアへ、現地で別れてスコットランド（エディンバラの国立博物館とハイラン地方）へ行く予定です。

昭39年 竹中彰 日本山岳会東京多摩支部も本年2月で5周年を迎えました。支部員数は、立ち上げ時の202人が390人目前となり、それなりに増勢を維持しています。多くは本年4年目となつた登山教室（初心者、初級）の修了生が多く、中でも婦人部隊が活発です（40～50歳代）。ソロソロ支部長退任をと考えますが、なかなか後任が難しい所です。今夏には藤原さんに引っ張って貰つて、懸案のバットレス4尾根を終らせたいと思います。

昭39年 村上泰介 蝶川さん夫妻と5月下旬に道央旅行、また来たる7月中旬にイタリア・ウンブリア&トスカナ旅行の予定（オルチャ渓谷、法王のテルメ、マルモレの滝、天空の城バツニヨレジオなど、おつとコルノ・グランデ2915mも）。後半戦は蝶川さん夫妻はスコットランドのネス湖へ、わたくしたちはファインランドのオーランド島

へ。

昭39年 中橋寿雄 足腰は不調ですが、その他は元気です。余生を楽しんで過ごしています。盛会を祈ります。

昭40年 三森茂充 典型的な老化現象で「膝の痛み」が癒えず、リハビリに通っています。だましだましでも、トレッキングが続けられるように願いつつ朝のウォーキングは続けています。車は手放し、必要に応じてレンタカーを利用するようになりました。これも終活の一環です。

昭40年 坂井益弘 お陰様で元気です。相変わらず箱根の山でキリのない霧と遊んでもらっています。

昭41年 池知昭洋 南竹さんが居ないのが淋しい！

昭42年 岡田健志 元気にすごしております。総会の日には北イタリアを旅行中です。

昭43年 中村雅明 FN短大主宰者の一人として1～2回／月、学生さんと山行共にしています。50才も離れた若者と歩くのはつらいですが、若者から若さをもらつてこの年ににして前より強くなつたと喜んでいます。今年は縦走の年と考え、3月に八ヶ岳

硫黄岳～天狗岳縦走、4月に大峯奥駈道（その1）、5月に北ア・蝶ヶ岳～常念岳～燕山莊縦走を行いました。7月は十勝岳連峰～

トムラウン、南ア南部の大きな縦走を2つ計画しています。足腰元気な内にと老骨に鞭打っています。

昭46年 金子晴彦 残念ながら欠席です。先日は八ヶ岳で大変楽しい思いをしました。

H U H A C の H P を覧下さい。

昭48年 松尾信孝 総会に出席できるかぎりぎりまで調整しましたが、やはりかないません。町会議員は議会以外はかなり時間があるものと高をくくついたら、あに岡らんや、委員会や陳情（と言つても町道を

拡幅してくれ位の話ですが）の現地調査などかなり時間だけはとられ、蓼科と日野町を行ったり来たりをしています。ただし、楽しんでやつてます。皆様によろしくお伝え下さい。

昭51年 加藤博行 針葉樹会総会の盛会をお祈りします。いずれ新潟から戻りますので、またお仲間に入れていただければと思います。9月の越後シリーズ妙高登山を楽しみにしております。

昭52年 中西茂 皆様のご活躍はホームページ等にて見させて頂いております。昭56年 小林修 アウトドアからインドアの剣道と居合に引き続き嵌つております。盛会をお祈り申し上げます。

昭59年 石川保典 五月にロンドン駐在か

ら戻り、現在は愛知県豊橋市で、中日新聞豊橋総局にあります。日本の住所は、これまで同様、愛知県長久手市です。宜しくお願いします。

昭59年 稲毛尚之 神戸に在勤中のため欠席させて頂きます。

昭63年 川名直理 当日は仕事が立て込む日にあたるため、出席できません。丸半年山に行っておらず、復活できるか心配ですが、夏にはまた行きたいと思っています。ご盛会をお祈りします。

昭63年 斎藤誠 4月から、いわき市の好間高校というところに転勤になりました。

平7年 古田茂 当日はコロラドに行つている予定ですので、欠席させていただきます。平15年 山田秀明 申し訳ございませんが、バンコク在住のため欠席とさせていただきます。ご盛会を期待しております。

平22年 糟谷知紀 松戸に在住しております。最近、妻も運動不足ということで、山登りをすすめています。6月に夫婦で熱海の玄岳に登つてきました。往復で4時間程度でしたが、運動不足がたたり翌日は筋肉痛でした。

三月会通信

■2015年6月15日■

【出席者】佐藤、上原、竹中、小島、佐藤（久）、岡田、中村（雅）、高崎（記録）

▽山登りは、朝早く行動を起こし、午後は早目に宿泊地に到着するのが原則です。「朝9時とか10時に歩き出すのは、この原則に反する」という事に異論のあらうはずがありません。懇親山行も例外ではあり得ず、越後シリーズで予定されている妙高山行も時間計画を練り直そう、という事になりました。初日に長い行程になるならば、前夜は、例えば燕温泉に宿泊するとか。前回の栗ヶ岳行の時、出発時間が遅かったので、暑さが激しくなり、結局、諦めざるを得なかつた経験が生かされていないのではないか？ その昔、遠くの山に行く場合は、新宿とか上野を夜行列車で出て、夜明け頃に目的地近くの駅で下車、眠さをこらえて歩き出したものだが、新幹線網が出来上がり、全くパターントが変わってしまった。ついでに、今の「妙高高原」駅は、その昔は「田口」という駅名だった。「上越線」は「上州」と「越後」を結ぶ事に由来する。また「上越市」は、上方（京都市）に近い南側から順に「上越、中越、下越」と呼ばれている越後の国の、上越地方の中心都市にあたる

ことに由来する、という事だそうです。この、懇親山行・妙高登山は、山行幹事の宮武さんと、上越市にお住いの加藤（博）さんとに企画してもらう事になっています。9月前半が予定されています。

▽中高年になるとテントを担いで登るのは負担が大きいので、山小屋を使うのが主になつて来ます。最近、雪の残る常念山脈を蝶ヶ岳から燕岳まで縦走した岡田さんによると蝶の小屋の食事は

酷かつた、学校給食用の中の区切られたプラスティック皿に粗末な惣菜だったそうです。それに引き替え、赤岳鉱泉の夕飯は、牛のステーキが出で豪華なものだった、両方とも宿泊料金は1万円弱で変わらないのに。

▽塔ノ岳「尊仏山荘」の名物猫（オス、「営業部長」だそうです）にまつわる話になりました。本間さんがいらっしゃらないのが残念ですが、今は老猫ですが、昔は、時期になると麓まで駆け下りて、子孫の繁殖に努めていた、という事です。従い、大倉の集落には、「営業部長」に似た猫が沢山いるとか。

▽今回は身近な「鳥」類の話でも賑やかになりました。鳥は、原則一夫一婦なのだそうですが、ツバメは例外で、一夫多妻なのだそうです。また、一年間に複数回の子育てをするそうです。昔から「富」を運んでくる鳥として大事にされていたが最近はめっきり少なくなつてしまつた。住宅事情（日本的な家屋が少なくなつた）、食糧事情（草の

生える原っぱが少なくなつた）、遠距離通勤（餌を求めて遠くまで飛ばなければならない）等が影響しているのではないか。ズズメも減つたし、オナガ、ヒヨドリも少なくなつた。時々ウグイスが来るのが、口笛で鳴き真似をすると、だんだん近寄つて来るようだ、それは陣地争いで、敵を確かめに来るのはないか、等々。雷鳥の話も出しましたが、その昔の「雷鳥談義」の域を出るような新説はありませんでした。

▽先週末に、国立で「新緑の宴」が開かれ、OBは5人、学生20名強の参加があつたそうです。部員の中からは、富士山に登りたい、劍岳に登りたいなど前向きな意見が出されるようになつて來た。これから4、5年かけて本格的な山岳部に育てていかねばならない、先ずは「縦走（天幕を背負つて）」、「雪の山」が今年の目標になろうか。部会の頻度を上げ、一緒にトレーニングをする、山岳部としてどういった山登りを目指すか話し合う、などもぜひ進めて欲しいところです。今年の1年部員が4年生になった時に、雪の北アルプスを、アイゼン・ピッケルを使って登る（縦走する？）位には成長して欲しいものです。

▽昔と違つて、学業・講義への出席が厳しくなつてゐるようですが、ボート部は昔ながらの活動を続けているようだし、海外遠征を重ねている運動部（ホッケー部、バレーボール部等）もあるようだ。山岳部としても、昔並みには行かずとも、もう少し活動の幅・期間を伸ばせないものか。ボート部

は部員の就職作戦が上手く出来上がっているようだ。就職面で、針葉樹会の協力が出来れば局面は変わるもの知れない、等話し合われました。

▽学生部員が増えて来て、財政面での援助も数年前とは様子が変わって来ています。会費を増額することもご時世から難しいとすれば、贊助会費をいかに多く集めることが出来るか、が針葉樹会の当面の課題にあるのでしよう。

●山行報告（F N・F N短大山行）

佐薙 5／31 八ヶ岳スープートレイル#5。金子さん最後の計画書？

6／1 八子ヶ峯

上原 なし

竹中 5／23 大岳山御岳山ケーブル経由往復（多摩支部初心者教室第4期）教室の付添い。登山日和の中を歩く

5／30 雲取山（埼玉・山梨・多摩3支部合同

山行）雲取山荘で交歓 出発時電車事故で1時間遅れる。

5／31 石尾根を下山。70才超の6人で奥多摩駅まで歩く。

6／1 メトロ会世話人会で日光・光徳小屋。アストリアホテルの温泉

6／12 山王峠～切込湖～刈込湖～湯元。湯元の温泉

6／13 御前山（初心者教室第4期）月夜見第2駐車場から往復、虫も出ず快適

小島 5／31 八ヶ岳スープートレイル。O B・

学生合同、八ヶ岳県界尾根

高崎 なし

岡田 なし

中村 5／24 谷川岳（マチガ沢）学生雪上訓練。

宮武、前神、中村、（学生）3名（内新入部員1名）

5／30 編笠山（中村、学生4名）（F N）観音

平から往復、観音平から甲斐小泉へ
5／31 八ヶ岳スープートレイル。O B（6名）・学生（11名）合同、八ヶ岳県界尾根・小天狗。金子、中村、学生10名は大天狗往復

■2015年7月21日 ■

【出席者】 佐薙、佐藤（久）、岡田、中村（雅）記録

今日は総会のすぐ後、また例年より早く梅雨が明けて、猛暑になつた為か、常連の竹中、小島、高崎（俊）、岡田、宮武各氏が欠席され3人のこぢんまりとした会でした。人数が少ない分、密度の濃い山談義が出来ました。三月会の世話役の高崎さんの代役で中村が報告します。

台風11号が通過した後、入れ替わりで佐薙さん、佐藤さん他4名が、十勝岳山麓の白銀荘をベースとして十勝岳、富良野岳を登りました。中村は台風の影響で天気不安定だったのではと危惧しましたが、連日好天に恵まれたそうです。

▽9月5～6日の妙高懇親山行は、既に上原さん、小野さん、岡田さん、小宮山さんが参加申し込み

縦走し、トムラウシ温泉に下山しました。山中、避難小屋1泊、テント2泊のかなりきつい縦走でしたが、入山の前日に回復した天気が下山まで続いた。5年前に大雪連峰・黒岳からトムラウシ南沼までの稜線を長男と2人で歩いているので、大雪連峰の縦走が完了し喜んでいます。佐薙さんは「熊の心配はなかつた」と質問されましたが、大雪と違つて熊が生息する場所が少ない為か登山者はあまり熊の心配はしていなかつたと答えました。また、「南沼からの下山路はどうんこ道でなかつた？」と聞かれましたが、「ずっと好天だったので水たまりが乾燥して楽に下りました」と答えました。5年前の下山の時は、暑い中をドロンコ道を長時間歩いてうんざりしたこと比べると雲泥の差でした。佐薙さんの質問は、2012年7月に佐薙さん、佐藤さん他8名が南沼にてテント泊してトムラウシに登った記録「針葉樹会報第125号「トムラウシ、黒岳～旭岳」」にカムイ天井から先が田んぼ状態の下り道で難儀した記述から発せられました。

台風11号が通過した後、入れ替わりで佐薙さん、佐藤さん他4名が、十勝岳山麓の白銀荘をベースとして十勝岳、富良野岳を登りました。中村は台風の影響で天気不安定だったのではと危惧しましたが、連日好天に恵まれたそうです。

されています。佐羅さん、中村が思案中です。幹事の宮武さん、加藤さんを加えると老若交った賑やかな山行になりそうです。過去、妙高懇親山行は2012年7月に行われていますが、その時は三井さん、中村、川名さんの3人、しかも三井さんが2p目でリタイアされたのでたつた2人の山行でした。コースは赤倉温泉からスカイケーブルで山頂駅（1266m）に登り、天狗堂（1900m）で燕温泉からの道と合流し、妙高南峰（2454m）に登頂し、北峰から下つて高谷ヒュッテ泊。翌日、火打山を往復後、笹ヶ峰に下山しました。今回のコースは前夜燕温泉（1100m）に泊り、北地獄ルートから妙高登頂後燕新道ルートで燕温泉へ下る周回コースです。標高差1400m、コースタイム4時間40分の登りは老には厳しそう。途中リタイアする人が出ることも考えておいた方が良いと意見一致しました。中村は、妙高山で皆と別れ、その日は高谷池ヒュッテ泊。翌日、火打山→焼山→金山→シゲクラ尾根→雨飾山と縦走し、小谷温泉に下山しようと言う大それたプランを考えています。但し、コースタイムを考えると焼山先の富士見峠でテント泊する必要があります。それとも金山から天狗原山経由で金山登山口に下山し雨飾荘に泊り、翌日、雨飾山を往復するか思案中です。

▽妙高の地図を見た佐藤さんが外輪山の三田原山から昔のスキーオーク宿の事を思い出し、3人のスキーや山行にまつわる話が弾みました。佐藤さんは

1年の時、田口→杉野沢（泊）→笹ヶ峰（泊）→三田原山の中腹にテント（泊）、三田原山登頂という初めてスキーを履いた1年生にとっては厳しいスキー合宿だったそうです（針葉樹第13号に記録有り）。それを最後にスキー合宿は実施されなかつたそうです。佐羅さんの時代はスキー合宿は梅池が恒例で成城ヒュッテをベースにしてスキーニューティン、乗鞍岳、白馬岳登頂も行った由（針葉樹第11号に記録有り）。乗鞍の大斜面の滑降は今も思い出すほど爽快だったとのことです。当時は梅池スキーフィールドが無く、ロープにつかまつて上がつたと中村が知らないことも話されました。中村の時代にはスキー合宿ではなく、1年の時に高崎さんに連れられて亡くなつた加藤（正巳）君と2人、谷川・天神平スキーフィールドにて泊をしてボーグンを教えていただいたのみでした。一緒に山に登つた年代はスキーで滑るよりワカンで歩く方が早い年代です。

▽小島さん、中村が7月末から8月初に南アルプス南部の縦走の予定です。樺島から入山し、荒川三山→赤石岳→聖岳→光岳と歩き、易老渡に下山します。山小屋に6泊。南アルプス南部の縦走は昔は大変で、転付峠を越えて二軒小屋に下り千枚岳まで南アルプス南部でも屈指の急登に苦しみ、はるばる光岳まで縦走した後の下山も寸又峡温泉まで延々10時間以上かかる林道歩きがあり、時間と体力がある学生時代でないとできないコースでした。70歳超の2人が縦走する気になつたのは、

静岡から樺島までのバス便があること、光岳小屋からタクシーを予約しておくと下山口の易老渡に比べると交通の便が良くなつたのと、小屋泊で縦走が出来るのは助かります。南アルプス南部までよくぞこれだけ登られたと驚く山行が12も記述されています。まだ仕事現役の50歳代、テント泊、単独行も多く、その年齢には殆ど山行をしなかつた自分にとっては敬服また敬服です。三峰岳から仙丈ヶ岳までの仙塩尾根、蝙蝠岳も歩かれているのは流石です。笊ヶ岳だけは4月に登りそこねたそうです。

▽三月会ではキジの話になると俄然盛り上がります。きっかけは中村が佐藤さんに「3年前に南沼でテント泊した時に、大キジどう打ちましたか」との問い合わせです。南沼には通常のトイレが無く、携帯トイレが1つあるのみです。このブース内で各自が持参した携帯トイレを使用します。使用した携帯トイレは移動用の密閉容器に入れて運び、下山口の回収BOXに入れるのが大雪山国立公園での「登山の心得」です。佐羅さん、佐藤さんは心得通り「携帯トイレ持参したよ」と

答えました。但し、この歳になると山に入ると貯め込めるので使用しなかつたそうです。前掲の針葉樹の記事には本間と蛭川は「担ぎ下ろした携帯トイレをトイレ棟前の回収箱に入れていた」と書かれています。

北海道在住の蛭川さんの指導が行き届いていたのでしょうか。ところが中村は不心得にも持参せず、南沼でなくトムラウン公園の岩場で用を足してしまったと白状しました。携帯トイレを持参しないのはテント泊の資格無しと自戒しました。今回、南沼キャンプ地は盛況で13張のテントで賑わりましたが、宿泊者は携帯トイレベースを使用している気配がなく、近くの岩場で済ませているのではと思ったことから質問でしたが、帰宅してからインターネットで調べたところ、大雪山域ではキャンプ指定地は登山者の急増とともにトイレ問題が発生しているそうです。特に「南沼キャンプ指定地」と「美瑛富士避難小屋キャンプ地」は悲惨でトイレ場を探すためのトイレ道がいたるところにでき、その先にはティッシュが散乱しているそうです。使用済の携帯トイレを長期間持ち歩くのは抵抗があるとのことなので、南沼の様に多くのテントが立ち並ぶキャンプ指定地にはバイオ式トイレの設置が望ましいのです。

● 山行報告 (FN.. FN短大山行)	
佐藤さん (久)	7/16~19 十勝岳・富良野岳 (詳細は佐藤さんの報告参照)
佐藤さん (久)	7/16~19 十勝岳・富良野岳。佐藤さん、小島さん、小野さん、宮武さん、橋本先生 (小野さんの山仲間の女医さん)、手塚さん (小野さんの北電山岳部の後輩)。
7/16	羽田→新千歳空港→富良野ラベンダー園観光→十勝吹上温泉白銀荘 (手塚さんの車で移動)
7/17	白銀荘→十勝岳→上富良野岳→十勝岳温泉→白銀荘
7/18	白銀荘→十勝岳温泉→富良野岳→十勝岳温泉→白銀荘
7/19	白銀荘→美瑛観光→新千歳空港→羽田
中村 (雅)	7/8~13 十勝岳連峰→トムラウシ縦走。長男と二人、避難小屋&テント泊
7/8	旭川→十勝岳温泉
7/9	旭川→十勝岳→上ホカメトック避難小屋
7/10	十勝岳→美瑛岳→双子池キャンプ地
7/11	コスマヌプリ→南沼キャンプ地
7/12	東大雪莊
7/13	帰京 (総会出席)

■ 2015年8月17日 ■

【出席者】 竹中、岡田、吉沢、中村 (雅)、宮武、高崎 (記録)

便利になる過ぎるのは考え方の、携帯トイレを家庭に常備しておくべきですねということでお開きになりました。

△今日は酷暑の中の開催になりました。事前に、小島さん、佐藤 (久) さんからの欠席の通知を頂いておりましたので、参加者の数が心配でした。

結果は、初参加の吉沢さん (昭和42年卒) を始め上記6名が集まり、話は弾みました。

△今夏の暑さは並大抵ではないので、山登り人間にはやはり「異常気象」が話題になります。局地的な大雨になつたり、最近では竜巻が報道されたり。我々が山登りに勢を出していた頃、聞こえ難いラジオを聞きながら天気図を作つていた頃、「竜巻」という言葉には、全く縁がなかつた。北アメリカの内陸部の何処かで起こる遠い国の話でしたが、最近では「藤沢市近郊で竜巻発生?」の報道があつたりで、世の中変わるものですね。

△天変地異と言えば、地震・火山も対象になります。最近の日本列島の火山活動は、「東日本大震災」の後、傾向が変わつてしまつたのか、活発になつてゐる様に思えます。西ノ島 口永良部島、箱根山、桜島など。最近は危険レベルの引き上げが相次ぎ、登山対象の山の火山活動はどうなつてゐるのか、事前調査が必要になつてきました。「休火山」の範疇に入る山でも、十分に注意しなければなりません。

▽人数が大幅に増えた「一橋山岳部」は、活動も活発になつて、本格的な「山岳部」に成長し始めた様です。今夏も、廻り目平をベースに瑞牆山、赤岳登山、幕営による穂高・槍、白根三山の縦走、など意欲的な計画が並びます。既に、雲取山に次いで富士山にも出かけた様です。ぐれぐれも事故を起こさない様、巻き込まれないよう、十分に注意して計画・実行・反省・記録をして欲しいものです。

▽恒例の「懇親山行・越後シリーズ」が9月の初旬に計画されています。上越市在住の加藤さん（昭和51年卒）のご協力を得ながら、宮武さんが幹事役で進められています。妙高山自体、焼山を含めて火山活動の活発な地域に入る事になるので、最新の情報を注意してルートなどを計画する必要がありそうですが、

▽竹中さん、藤原さん、金子さんが意欲的に進められているN M K B（中川記念北岳バットレス登攀行）は、いよいよ8月26日入山を目指して最終準備段階に入りました。これまで天候に恵まれず、不運続きですが、今回は天候を見極め、日程にも柔軟性を持たせて取り組まれています。是非成功させて下さい。北岳バットレスの次は、剣岳のチネネをお考への様です。ただし、最近は「三人の窓」での幕営が禁止になつてゐる様で、「二股から」のアプローチは少しキツそうです。一橋特にヤロー会中川さんゆかりの「左棧線」が対象になるのでしょうか。

▽勇躍、南アルプスの南部縦走に挑戦された小島さん、中村（雅）さんペーティは、体調不良の方が

出て、途中で断念された様です。赤木沢も数年がかりで完成させた方々ですから、必ずや、夢を叶えられる事と期待します。南の南といえば奥深い

山で、交通の便もあまり良くない場所ですから、帰路も難儀する心配があります。今回のトライで、この稜線からでも「携帯電話」が比較的良く通ずる事が分かった、との事でした。携帯電話会社にもよるのでしょうかが、今回はドコモだったとの事です。地域によって異なるのでしょうかが、山の中では「ドコモ」が良く通じる、という話を聞きます。また、静岡・構島間のバスは便数が極めて少なく事前の予約が必須の様です。入山時はともかく、下山時には山中から予約を入れておかなないと乗りそびれる恐れがあるので、この山域では必携かも知れません。因みにバスは3100円、タクシーは1万150円／人だそうです。

▽42年卒の吉沢さんが初参加されました。如水会館にはかなり頻繁に顔を出されている様です。目的は、「囲碁」の会だそうです。かなりの実力をお持ちの様子でした。この「囲碁の会」で石（元学長）先輩にチョクチョク会われ、たまには差し合ふ事もある様です。「最近、かなり実力をあげられた様だ」との話でした。

支部第3期登山教室のサポート。百尋の滝ルートがスズメバチのため閉鎖されていたので。

岡田 7／7～17 ミラノ（イタリア）ミラノ万博見学、ボルミオ（北伊）に滞在、バルチエツタ山、ヘルニナ山見物

中村（雅） 7／28～8／2 南ア・荒川三山から赤石岳。小島さんと二人

7／28 静岡～構島

7／29 千枚小屋

7／30 ～荒川三山（東岳、中岳、前岳）から

荒川小屋

7／31 ～赤石岳～百間洞

8／1 ～赤石岳～赤石小屋

8／2 ～構島～帰京。百間洞小屋で小島さん一睡も出来ず、聖平行きを諦め、赤石小屋に戻る。

8／9 奥多摩・水根沢（F N）。藤原さん、太田君と3人、滝登りでしごかれた。

宮武 8／2～4 瑞牆山（F N）（学生）太田、工藤

■2015年9月24日■

【出席者】佐藤、小島、佐藤（久）、岡田、中村（雅）、宮武、高崎（記録）

▽越後シリーズの一環として、今回は妙高山で懇親山行が催されました。地元、新潟県三条市に在住するのでしようか。

● 山行報告

竹中 7／25 川苔山。鳩ノ巣駅より往復。多摩

の加藤（博）さん（昭和51年卒）に企画して頂き、9月5、6日に実施されました。後半、雨に祟られて、泥水に悩まされたようですが、標高差1400mを登降するという難行を落伍者なしに完遂されました。行動時間は12時間を超える

長丁場になり、さすがの佐薙さんも、帰宅後は今まで経験した事のないような筋肉痛に悩まされたそうです。雨でぬかるんだ道を長いこと歩いたのも原因の一つかも知れませんが、参加者の一人の靴が壊れてしまつたようです。針金を持参していたメンバーに加えて、ベンチを持参した用意の良いメンバーもいて、大事に至らずに済みました。登山の最中に靴が壊れる事も想定しておかなければならぬ事故の一つですが、捻挫・骨折などの時に役立つテープも壊れた登山靴の応急修理には十分使えるとの事です。また、我々のように頻度の高い山登りを楽しむ輩は、3～5年毎には底のビブラムを張り替えておく方が安全でしょう。来年の懇親山行には、福島から参加された斎藤（誠、昭和63年卒）さんの推薦もあって、「奥会津の志津倉山に行こう」

△このところ、毎年のように初秋にはヒマラヤ・トレッキングに出かけている佐藤（久）さんは、今年は趣を変えて、スイス・アルプスに出かけられました。中国国際航空（思惑通り、往復とも空いていて、エコノミー席でも樂が出来た）を使って北京経由でジュネーブに飛び、1箇所あたり4泊程度逗留して、モンブラン、マッターホルン、ベルニナ、ユングフラウ、アイガーなどの景観を堪能し、12回のハイキングを楽しんで来たそうです。鉄道・バスを使って移動し、有名な観光地に隣接する街に宿泊すると宿代も格段に安く、あちこち歩き回つて来たという事です。

△野鳥・花・樹木・富士山等いつも佐薙先輩の博識に畏敬の念を露わにしている宮武さんが『火山入門』（島村英紀著、NHK出版新書）という書物を披露してくれました。東日本大震災以降、活動期に入つたようだと言われている日本の火山（昨年の雌阿寒岳、今年の十勝岳、妙高山等を含む）活動は、登山者にとつても気になるところで、勉強しておくに越した事はありません。火山に関する書物は多くあります、佐薙さんのお勧めは『日本の火山図鑑』、110すべての活火山の噴火と特徴がわかる（高橋正樹著、誠文堂新光社）だそうです。最近の毎日新聞によれば、日本にある110の火山のうち、50の火山が常時監視体制のある火山で、噴火警戒レベルが設定されています。関東地方では、那須岳、白根山（草津、日光）、浅間山、富士山、箱根山、東伊豆火山群等

△その昔、大先輩の石井さん・山崎さんを交えて「最後に登る3千メートル峰は何處が良いか？」という話になつた時、選ばれたのが南アルプス「塩見岳（3047m）」だったそうです。ご両人の体力測定も兼ねて事前に編笠岳・権現岳をトレースした後、三伏小屋・塩見小屋の予約も済ませ、佐薙さん、本間さんがサポートして出発する直前に、其々の大先輩の「家族の反対を押し切れない」「親戚の不幸があつた」の理由から断念した、という話がありました。「俺もそういう歳になつたから」と仰る方が、「何處にしようか？」と考えるようになつたそうです。最近の妙高登山に至る

した。何方か手を挙げませんか？ 親切丁寧な指導が受けられます。

△今年の「メトロ会」（東京及びその近郊の13大学山岳部・OB会の連合体の懇親会）が先週開かれました。ほとんどの大学山岳部は部員数が一桁で皆さん新入部員の獲得に苦労されています。この中で、我が一橋山岳部の「26人を抱えて活動している」という話は、会場で大きな反響を呼んだのですが、部員数だけではなく活動内容でも、他の大学から一目置かれるような実績を残して欲しいのです。そのためにも、事故を起さない事は当然として、当分は若手OB・OGの支援が強く望されます。例えば、今の1年生部員が4年生になった時に、どんな冬山に挑戦する事が出来るか、自分達でも考えて欲しいし、我々の親身の指導も不可欠と思います。

△その昔、大先輩の石井さん・山崎さんを交えて「最後に登る3千メートル峰は何處が良いか？」という話になつた時、選ばれたのが南アルプス「塩見岳（3047m）」だったそうです。ご両人の体力測定も兼ねて事前に編笠岳・権現岳をトレースした後、三伏小屋・塩見小屋の予約も済ませ、佐薙さん、本間さんがサポートして出発する直前に、其々の大先輩の「家族の反対を押し切れない」「親戚の不幸があつた」の理由から断念した、という話がありました。「俺もそういう歳になつたから」と仰る方が、「何處にしようか？」と考えるようになつたそうです。最近の妙高登山に至る

山登りの実績から判断しても、また普段の言動からも、とてもそんな年齢には見えませんが。

▽「森伊藏」、「百年の孤独」など、アルコール・アレルギーの人間には全く興味のない焼酎の銘柄の話題になりました。現在「森伊藏」の入手は極めて難しいそうで、電話でのみ受け付けて抽選で販売している。入手出来る確率は0・2%、だそうです。JALのファースト、ビジネスクラス

で、期間限定・一人一本で機内販売されている、という話もありました。如水会館の「一橋クラブ」で提供されている高崎酒造の焼酎は「しま安納」と「しまむらさき」の二つの銘柄です。その昔は「しま茜」が供されていましたが、地元種子島の皆さんから「しま茜は、種子島民が育てた焼酎だから、島の外に出すのは罷りならん」と申し入れがあつて、今は島の中だけでしか手に入らないとの事です。

▽今年の「夜叉神峠周辺の登山道整備」事業は、11月初旬に行われます。大周回路の一部で、整備の

完成されていない「桧尾峰」から「カンバ平」の間の登山道を整備する計画です。「カンバ平」は、白根三山・鳳凰三山・甲斐駒ヶ岳などの眺望が良い「絶景ポイント」です。大勢の皆様の参加を期待します。

▽深田久弥氏の「日本百名山」に拘るわけではないのだけれど、登り残している山々の中で、そろそろ登つておかないと佐藤さんが思う山が東北の「飯豊山」、「朝日岳」と「皇海山」で、同行者

を募っています。また、山登りの基本原則に則った登り方で「雲取山」に登らないか、という提案もありました。1日目に丹波山村から入山して「三条の湯」に泊まり、翌日、朝早く出て雲取山の頂上を踏み、七ツ石から鴨沢に下る、古典的なルートです。雪のこないうちに。

● 山行報告

佐藤 9/5~6 妙高山。登り苦登、下り途中から雨。帰宅後2日筋肉痛、今までこんなことがあった。

小島 8/22~23 大台ヶ原 馬越峠~天狗倉山。クレージー会。半場さん幹事、小野、佐藤(力)、

小島 宮武(特別支援)
佐藤(久) 8/27~9/14 スイス・アルプスハイキング三昧。シャモニー、ツェルマット、ポントレジーナ、グリンデルワルトを起点として、12回のハイキングを楽しんだ。

高崎 9/20 蓼科山 女神茶屋から往復、穂高連峰が遠望出来た。

中村(雅) 9/5~6 妙高山。雨飾山への縦走(延長戦)は、山行前に悪天候のため取り止め、皆さんと一緒に行動

富武 8/22~23 大台ヶ原。クレージー会山行に特別参加

9/5~6 妙高山 新潟の加藤(博)さんの案内で懇親山行

■ 会費納入のお願い

平成27年度(27年6月~28年5月)の会費納入をお願いいたします。

会費(普通会費)は卒業年次に關係なく、一律5000円です。(ただし、昭和29年度以前卒業の会員は従来通り会費免除となります)。

また、普通会費のほかに、期間を問わずに賛助会費を募集しております。賛助会費は一口1000円で、口数は任意です。

近年、学生部員の増加に伴い山岳部への支援強化の必要性が高まっていますので、その資金手当のためにも、賛助会費へのご協力をお願い申し上げます。

◎会費納入先

三菱東京UFJ銀行 赤坂支店
口座名 針葉樹会
口座番号 普通4825647

*振込の際、適用欄にお名前と卒年次をご記入ください。

会計幹事 佐藤久尚

▼今号は少し発行が遅れましたが多くの会員・部員のご協力で充実した内容の会報になりました。有難うございました。但し、最近の傾向ですが、針葉樹会員の山行が少なく、寄稿して頂く会員が限られており寂しいところです。そんな中で昭31年の佐藤さんの多年に亘る北海道山行の纏めは、貴重な寄稿で、後に続く後輩が沢山出て欲しいと思っています。これから会報には昭50年代の卒業会員にもどんどん寄稿頂きたいと思っています。一方現役部員の寄稿は、山行内容も、文章も素晴らしいなってきました。単に部員が多いだけでなく内容が良くなっている証かと思いい、うれしく思っています。指導にあたっておられる、F N 短大、学生幹事の皆さんに感謝し、尚一層のご指導をお願いします。

私事ですが、今回の山行報告の中の十勝・富良野、南アルプス、紀伊山地、妙高の山行には私も参加することが出来ました。夏山の素晴らしさを再確認した次第です。会員の皆さんがあつと山を楽しんで、気楽に山行の報告をして頂きたいと思います。

(小島)

▼昔、山小屋のおやじなどがゴム長靴をはいて雪の上でもどこでも歩き回っているのを見て、「大丈夫かいな」と思つてましたが、今はワサビ田でも山仕事でも山に入るときは年中、長靴を愛用しています。もつともホームセンターで売っているような安物ではなく、軽登山靴が買えるぐらいの値段がする、滑り止めの鉢がついた山林作業用の長靴で、藪の中を歩き回つてもまず破れないし水漏れもないタフな優れものです。それでも3年以上もはいていると、少し水が浸みてくるようになります。そんなときには「シームグリップ」という強力な防水接着剤をここぞと思

った所に塗つておくとまず大丈夫です。こいつは登山靴や雨合羽などにも使えるので用意しておくといかもしません。

(井草)

▼8月末、「リニア新幹線を考える登山者の会」で、長野県大鹿村に行つてきました。ここは「日本で最も美しい村連合」に加盟している村です。南アルプスの登山口としてだけなく、温泉、大鹿歌舞伎、山菜、ジビエ、中央構造線、パワースポットなど、日本の里山の豊かさを堪能できます。とてもユニークな場所で、何度も訪れてみたいと思われる土地柄でした。その村の沢筋にリニア新幹線のトンネルの残土が大量に積まれるといいます。狭くて勾配のきつい林道をダンプが一日に最大1700台も通る計画だといいます。トンネルが掘られるとそこに水が集中して流れます。沢が枯れ、湿気によつて育まれる豊かな植生が変わるために、沢が枯れ、湿気によつて育まれる豊かな植生が変わることもいわれています。集落にある神社の古木を、残土を運ぶダンプの邪魔だから切り倒せという要請も来ているそうです。

自分はこれまで登山者として、登山道とピーカーの連なりにしか目を向けてきませんでしたが愛する南アルプスの自然全体が、その足元から損なわれる危機に、今、直面しているのだと感じました。山は悲鳴を上げられません。その声を聞き取れるのは、南アルプスのよさを心に刻む幸せを享受してきた登山者や釣り人ではないでしょうか。針葉樹会のみなさんは、南アルプスの奥深さに特別な価値を見いだす経験をお持ちだと思います。あまり情報が出まわつていませんが、ぜひ、登山者=当事者として、リニア新幹線が南アルプスの自然や里山にもたらす影響について、関心を持っていただきたいと願うようになりました。(川名)